

東北ヘルプ ニュースレター

2023年 夏号

目次

巻頭言 1頁

アルベルゲを求めて 2頁

1. 「カリタス南三陸」の千葉道生さんと 3～4頁
2. 「雄勝ローズファクトリーガーデン」の徳水博志さんと 4～7頁
3. 集まる仲間 8～9頁

コラム1：東北の過去と未来をつないで 10～11頁

想いは響いて 12頁

1. 「Love is Action」の緑化事業 13頁
2. こどもたちの未来を拓く 14頁～17頁
3. 石巻平和七夕（鮎川と広島と） 18頁



コラム2：過去と未来のつなぎ方 19～20頁

みちのく潮風トレイルの南の先に 21頁

1. 故郷に花園を 22～23頁
2. 原発被災地に生きる子どもたちへのメッセージ 24～30頁



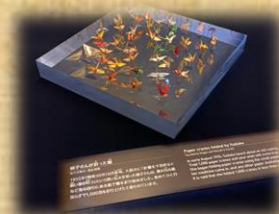
コラム3：過去を未来につなげなければ 30頁

福島放射能計測所「いのり」開所式 31～34頁

会計報告・献金感謝 35～36頁

巻末言 37

補遺：【秋田水害】秋田中央キリスト教会 支援へのお願い 38頁



巻頭言

「被災地に、アルベルグを作りたいのです」
 ——日本キリスト教会福島伝道所牧師の芳賀繁浩さんが、東北ヘルプを訪ねてくださり、そして夢を語って下さいました。今回のニュースレターは、芳賀さんの夢をたどるようにして、製作しました。

北は宮城県南三陸町から、南は福島県いわき市まで。時代は「600年前」から「もうすぐその未来」まで——今回のニュースレターは、遠く離れたものをつなぐものとなりました。

今回のニュースレターは、「みちのく潮風トレイル」をたどる旅のように製作しました。右にあります地図は、「みちのく潮風トレイル」の全行程を示したものです。「みちのく潮風トレイル」とは、環境省と津波被災地域の方々が力を合わせて開発している「歩く道」です。青森・岩手・宮城・福島の津波被災地を

縦貫する1,025kmです——東北の津波被災地だけで、この距離です。その長さに、改めて驚きます。そして、この「道」は、原発事故による強制避難地の手前で途切れています。津波被災地はさらに、そのはるか先、実に千葉県にまで及んでいるのです。その長大な距離にひるまずに、私も現場で復興を考えたい。今回のニュースレターは、その新しい一歩となっています。

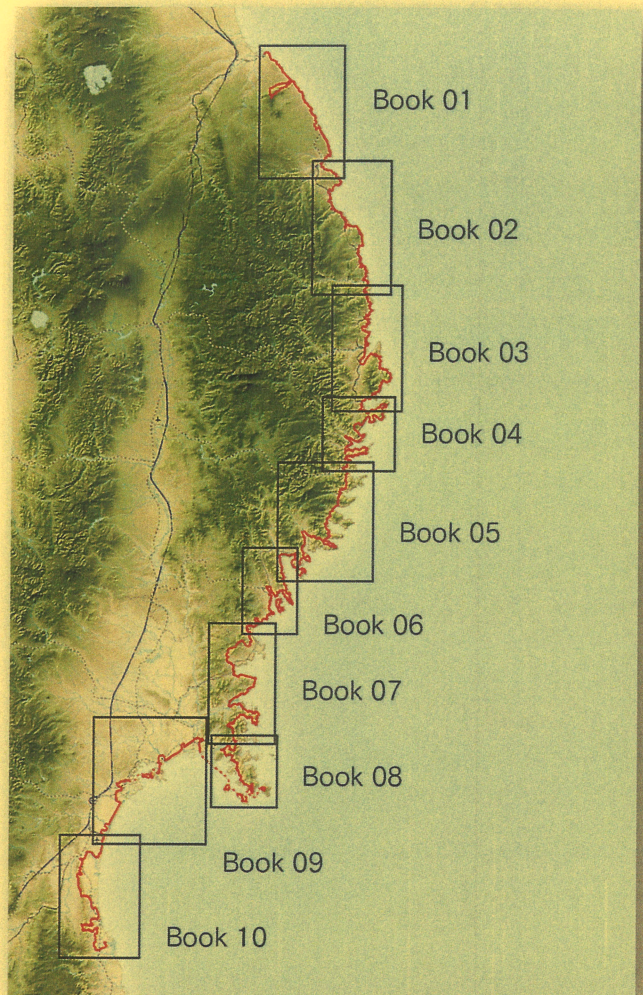
旅をするように、このニュースレターを作りながら、改めて現場に立って「復興」を考えました。振り返れば、もう12年も、そうしてきました。そして今回、現場に学び、おぼろげながら、何かが見えてきた気がします。その結論をここに先に記します。

——復興とは、過去と未来をつなぐこと——

このことを、今回のニュースレターは、三つの「コラム」にまとめています。

「津波被災地と原発被災地」をつなぐ私たちの旅は、「広島原爆と福島原発」をつなぎます。また「故郷と未来の世代」をつなぎます。そうして「過去」が再び起き上がってくる。その中に「復興」がある。そんなことを、今回、お伝えできればうれしく思います。

2023年の広島原爆の日に
 東北ヘルプ代表 川上直哉



アルベルゲを求めて

スペインには「アルベルゲ」と呼ばれるものがあります。

「アルベルゲ」は、「サンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼路」にあります。

西欧に限らず、宗教を問わず、多くの人々が、「サンチャゴ巡礼路」を歩いています。

スペインの西の果てから広がるこの古い巡礼路は、世界遺産にも登録されています。

この巡礼路を訪れる世界中の人々のために「アルベルゲ」があります。

「アルベルゲ」とは、巡礼者のための宿泊所のことです。

2011年3月11日の東日本大震災の被災地に、「みちのく潮風トレイル」が開通しました。環境省が主導し、多くのボランティアが整備を進めてきました。甚大な津波の被害を蒙った「青森県八戸市蕪島から福島県相馬市松川浦までの沿岸地域」が、一筆書きのように、一本の歩道でつながりました。そこを歩く時、人は多くの事柄を想い、そしておそらく、自分自身を見つけ直します。

その「みちのく潮風トレイル」を「サンチャゴ巡礼路」に重ねてみますと、そこに足りないものが、見えてきます。たとえばそれが「アルベルゲ（宿泊所）」だと、牧師の芳賀さんはおっしゃいます。

「3.11の被災地に踏みとどまっている支援センターと協力して、新しいアルベルゲを作り出せないか。そうして、『みちのく潮風トレイル』が巡礼路としての機能を持つことができないだろうか。」

そう熱っぽく語る芳賀繁浩先生と、少しの旅をしました。

「東北キリシタン」の史跡のすぐそばで、南三陸町の被災地を支援し続けている「カリタス南三陸」の千葉さん。巨大防潮堤をはじめとする大規模公共事業によって作り変えられてた故郷を、美しい花園で回復させようと汗を流す「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」の徳水さん。そして「みちのく潮風トレイル」を含む津波被災地の全てを踏破した大平さんと、「人生の旅」を支える働きをしたいと願う僧侶の松谷さん——以下、その出会いの場面を切り取って、ご紹介します。津波被災地の全体を俯瞰する対話に、被災地の今・被災後の東北を感じ取っていただければ幸いです。



(川上記)

1. 「カリタス南三陸」の千葉道生さんと：

2023年6月14日の午前中、私・川上（東北ヘルプ代表）と芳賀さん（日本キリスト教会福島伝道所 牧師・日本アルベルゲ協会 代表理事）は、宮城県登米市にある「カリタス南三陸」を訪問しました。すぐそばに「三経塚 殉教地」がある米川という小さな町に、「カリタス南三陸」がありました。

——自己紹介をお願いします。

千葉さん：

「カリタス南三陸」の千葉道生です。3人で社団法人を組織して、南三陸町などの被災後の日々に伴走する日々を過ごしています。

芳賀さん：

芳賀繁浩と申します。福島市で牧師をしています。そして私も「日本アルベルゲ協会」という社団法人の代表をしているのですが、私たちの団体も、同じく「3人」で構成しています。

千葉さん：

「アルベルゲ」ですか。懐かしいです。私は、父に勧められて、フランスのテゼという村からから出立して、スペインのサンチャゴを目指して、巡礼の旅をしたことがあります。「歩く」ことの奥深さ。出会いの楽しさ——それは忘れがたい思い出でした。

日本に帰って来て「ああ、ここには巡礼者がいないんだな・・・」と、ふと、語ったことがあります。その時、尊敬する方から、「それは違う。赤ちゃんをだっこするお母さんがそこにいる。あのお母さんこそ、まさに人生の旅路を歩く巡礼者ではないか」と言われました。本当にそうだと、反省した思い出があります。

——巡礼は、人種も宗教も場所も問わない、全ての人のものだ、という事ですね。

芳賀さん：

実際、スペインの「サンチャゴ巡礼路」を、今、たくさんの無宗教者も、そしてスラム教徒の方々も、歩いています。



千葉道生さんと「カリタス南三陸」については「ニュースレター」2021年クリスマス号 <https://x.gd/0y59X> に、ご紹介していました。

千葉さん：

今のそうした状況は、素晴らしいことですね。そこまで、長い道のりがあったことを思います。たとえば、「アラブの化け物を倒した話」が、スペインの巡礼路のそばに残されているのです。イスラム教の方々と共に歩く道で、そうした歴史に触れる。それは、とても大切な経験となります。

——巡礼路は、過去に・歴史に、つながっているのですね。そして、この「カリタス南三陸」のすぐそばに、江戸時代の「キリシタン殉教史跡」がある。「みちのく潮風トレイル」の少し内陸側にも、歴史の息遣いが聞こえる場所がありますね。

芳賀さん：

私は、福島市で牧師をしています。福島市には、双葉町（福島第一原発がある町）はじめ、原発事故によって強制的に避難させられた人々が、たくさん住んでいます。実は、私の妻は双葉町出身なので、そうした人々のことがとても身近に感じられます。

原発に近い場所に住んでいた、というだけの理由で、故郷を離れなければならなくなった方々のことを思うと、とても切ない思いがします。避難してこられた方々の多くは、「森合」や「渡利」という地区（福島市の南東地域）にお住まいになっているのです。つまり、そこは「少しでも、たとえ1kmでも故郷に近い所」なのです。避難され移住された方々の思いが、そこに感じられます。そして、その思いは具体的な行動に移されています。皆さん、遠い道のを車で通いながら「失われつつある故郷」を維持しているのです。「除染」のた

めに、思い出の詰まった自宅を解体しなければならなかった多くの方々がおられます。定められた期限までに解体をしないと「国からの費用」が出ない、という政策的な誘導があるのです。そうした形で「故郷が失われつつある」。そうした中で、故郷に足を運び、掃除をし、庭の手入れをする方たちがいる。当面、そこには住む見込みが立たないのです。でも、そうする。それが、故郷を守ることだからです。

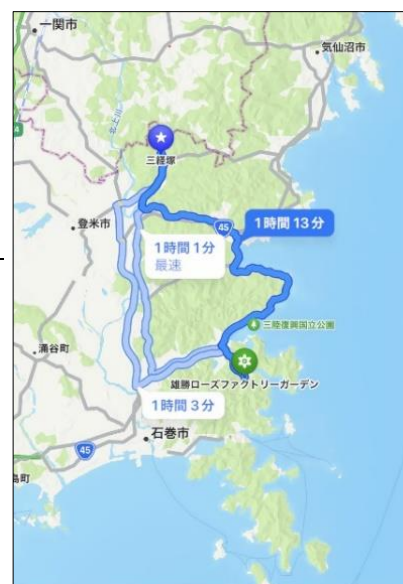
——思い出が詰まった故郷とのつながりを保ち、育てること。被災地の「復興」というなら、被災した方々一人ひとりの「過去とのつながり」の中に、その基礎があるのでしょうか。

芳賀さん：

「水とトイレと安い宿」、それが「アルベルゲ(巡礼宿)」です。それがあれば、「悲しみの地」が、「追

悼と再生への祈りで連ねる魂の道(カミーノ=巡礼路)」になると思います。そして、被災地に思いを寄せる人たちだけではなく、故郷を守ろうとする方々のためにも「アルベルゲ」が役立つはずだ、と思うのです。多くの方が、そうした故郷を想う一つひとつの想いに触れる、そんな機会が作ればと願っています。傷つけられ損なわれた故郷を取り戻そうとする現場。そんな場所があればと思うのです。

ただ、被ばくの問題はいつも、悩みの種です。まだまだ、放射線量は高い。放射性核種による「内部被ばく」の問題も付きまといまいます。決して、安心して戻れる場所ではないのです。でも、その故郷を守ろうとする人々がいる。その息遣いを、何かの形で伝えることができればと、考えています。



2. 「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」の徳水博志さんと：

私たちはそのまま、2023年6月14日の午後、「カリタス南三陸」から南に1時間ほど自動車移動し、石巻市雄勝町を訪ねました。ずっと、海岸線をたどりました。「みちのく潮風トレイル」に沿ったルートを選択し、南下したのです。道路は見事に「復興」していました。それでも、津波の傷跡はなお、生々しく広がります。そうした道を自動車南下して、私たちは雄勝町に「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」を訪ねたのでした。

——いつもお世話になります。今日は、改めて、ここでの働きをご紹介しますでしょうか。

徳水さん：

一般社団法人「雄勝花物語」を妻と立ち上げ、今、7人の高齢者と運営しています。中心に「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」を置いて、「花と緑の力で、人を繋がり、希望をつむぐ」働きを進めています。

2011年の3月11日、私は、雄勝小学校で教師をしていました。大津波に遭い、そしてその後も、実にたくさんの方がいました。「東北ヘルプ」さんのニュースレター(2023年イースター号)で取り上げていただいた通り、ここには巨大防潮堤が

できました。津波は「20メートル」を超える高さで町を破壊しましたが、その対策として「約10メートル」の巨大防潮堤が建設されたのです。当然、たいへんな「賛否両論」が生まれました。それはまさに、東北ヘルプさんの「ニュースレター」(2023年イースター号)でご紹介頂いた通りです。私も、「巨大防潮堤建設は手つかずの自然を壊してしまい、町の持続可能性を奪う。それは持続可能ではない」と、見直し運動の急先鋒に立ちました。宮城県との話し合いは1年間続きましたが、終始平行線。結果は決裂し、防潮堤が建設されてしまいました。

でも、その先がある、という事を、是非、知っていただきたいと思います。今、もう一度、美しい故郷を、この町にかかわる「みんな」でつくりあげようと思っています。ここ「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」が、そのために役割を持てればと、そう願って、多くの方々と共に歩んでいます。今は、私たちを含めた「5団体」が協力し、「雄勝ガーデンパーク構想」を推進しています。それは、この地に住む人々が主体となって美しい故郷を作り出し、行政もコスト削減を実現しながら、新しい事業を起こして未来へつなぐ、というプランです。そしてその青写真の最初は、震災後の雄勝小学校の6年生が考え、「まちづくり協議会」で、私たちにプレゼンテーションしてくれたものでした。

芳賀さん:

はじめまして。福島市で牧師をしています、芳賀繁浩と申します。福島の実情を見つめながら、「みちのく潮風トレイル」を「巡礼の道」として活用できないか考えて、「日本アルベルゲ協会」を立ち上げました。「アルベルゲ」とは、スペインの巡礼宿のことです。

徳水さん:

福島原発事故は、私たちに大切な教訓を残したはずですが、それでも、それが忘れられがちであることを残念に思います。例えば、防潮堤などのハード事業は、人間の力で自然の力を封じ込めようとするものになっています。「そうしたことは無理なのだ」と、私たちは全員、原発事故で知ったはずでした。でも、忘れてしまう。それで、復興工事のちぐはぐな問題点があちこちに露呈します。そこに、人間の知恵の限界がよく表れているように思います。

——巨大な津波の被害があり、そして、「復興事業」を巡って住民の意見も分かれ、そして「4000人」いた町が「1000人」になった。「復興」をきっかりに、「震災前」に累積していた現実が噴き出してしまった。それが、ここ石巻市雄勝町の現実だと伺っています。「復興」の難しさを、私たちはここで学ばせて頂いていると思います。

徳水さん:

確かに、ここまでの「復興」は、問題点にあふれていました。私たちの「ガーデン」も、一度美しく整備できましたのに、「復興道路」の建設のためにと、移転を余儀なくされました。本当に悔しい思いを何度もしましたのです。そうですね。住民が納得できる「復興」は、とても難しい。私たちにとっても、それは納得のいかないことだらけでした。

しかし行政批判だけを繰り返していても雄勝の現実は変わりません。現実を少しでもよりよく変えていくためには、何を為すべきかと発想しました。すると、不思議な助けが、いつもありました。とりわけ、造園と園芸の専門家の先生たちがボランティアで力を貸してくださり、物語のある美しい庭が生まれました。その過程に、数えきれない人々の善意がありました。それは課題を乗り越える鮮やかな出来事だったと思います。それがこの「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」です。それは、人の目には奇跡と思われることでした。今も、毎年、8000人を超える人々・数えきれないほどの方々が、このガーデンに来てくださいます。花を見に来る人。ボランティアに来てくださる、年間1000人もの方々。研修の現場に活用くださる企業や省庁——本当に、いろいろな方がお越しになります。そうして、特に若い人々は、「復興」の現実と向き合いながら、何かを学んで帰ってくださる。そんなことを、ずっと拝見しています。

芳賀さん:

福島市には「花見山公園」という花の名所がありますが、そこは私有地です。もともとは「販売用」として花を育てていた場所でした。山だから開花の時期になると遠くからも花が見える。見せて欲しいという声が聞こえてくるようになって、自由に花を見



「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」のハウスの中で。左が芳賀さん・右が徳水さん。

てもらおうと遊歩道を整備した。すると、写真家の故・秋山庄太郎さんなど、「福島に桃源郷あり」と紹介して下さる方が起こされ、今では首都圏・関西からも観光バスが来る福島県屈指の観光名所になりました。「個人の意志」は、すごい。決して、馬鹿にできない。そうした事例が、ここにもあるのだと思います。

徳水さん：

津波の後、全壊した雄勝小学校校舎のがれきの中で子どもの作品を探し、見つめている私の写真が、朝日新聞で報道されました。それを見た知人・友人から、励ましの手紙が来ました。そして支援物資続々と届きました。「見えない力が働いている」と思いました。「ここに、神様の愛が注がれている」と、そんな確信を持ったのです。そして、その「神さまの愛」を分かちあう喜びを知りました。「雄勝を愛せよ」「ここで大切な働きをせよ」と、そんな声が聞こえてきました。

——新約聖書「ヨハネ伝」21章15節の言葉ですね。

徳水さん：

はい。妻も、旧約聖書「エレミヤ書」から、地域の未来展望を与えられています。瓦礫に飲み込まれた実家があり、壊滅した故郷が残された。その「空と山」から、声が聞こえたのだそうです。「さみしい」と、妻には聞こえた。そして、妻は「二株」の花を植えたのです。それがこの「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」の始まりでした。

なるほど、そうしたことは、どこまでも「個人」の経験でした。しかしそれは、私と妻のそれぞれの魂の内に立てられた「主イエス・キリストの志」でした。その志は確かに、どんな苦境にも負けない力を帯びていたのだ、と思います。

——聖書の言葉には、魂を支える力がありますね。

徳水さん：

ヨハネ伝15章16節の言葉も、私にとっては大切なものとなりました。つまり、「あなた方が私を選んだのではない。私があなた方を選んだ。あなた方が出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、

また私の名によって父の願うものは何でも与えられるようにと、私があなた方を任命したのである」とあります。その通りのことが、現在、実現しています。そのことを思う時、「私たちはただの器にすぎない」と、実感します。聖書の神・主が、すべてを備えられており、私たちはそれを受け取る器にすぎないことを、実感しているのです。ですから、自分の力に誇れるものは何もないと、そう思っています。

芳賀さん：

器があるから、そこに大切なものが盛られる。そんなことを思います。私たち一人ひとは、粗末な「土の器」かもしれない。でも、その「器」があることが貴い。そして、徳水さんたちの場合は、その「器」が、「空っぽで大きかった」のだと思いました。それは、すごいことだったのだと。

徳水さん：

私ももう、70歳近いのです。肉体的に辛い所がある。けれど、精神的には、まったく辛いことはありません。毎日、不思議な喜びがあるのです。人から称賛されなくてもいい。利益を得なくてもいい。ただ、人々に癒しの空間を提供し、地域を未来の子供たちに残して行くこと、だと思っています。そのためには、「本当に大切なこと」だけを、しっかり見ていけばいい。こんな楽な生き方はないと思います。

——「本当に大切なこと」を見つけることができた。

それは素晴らしいことでした。

徳水さん：

「600年」の長い期間、この雄勝の地には、人が住んできました。その大切な故郷を、次の世代に伝えること。それは「本当に大切なこと」だと思いません。そして、そのために、無償の善意が、今でもずっと集まってきています。ですから、私たちも無償で愛を分け合うようにする。「無償で受けたものは、無償で与える」（新約聖書「マタイ伝」10章8節等）ために、ガーデンは無料開放としています。これも「本当に大切なこと」だと思っています。そうした「本当に大切なこと」を、しっかり見つめて、日々、手足を動かし、汗を流す。その日々は、楽しい。そう思います。

芳賀さん:

手足を動かして働く。日々、汗を流して働く。そうして、人生の一つひとつが腑に落ちて行く——そのような生き方が大事なのだと、お話を伺って実感します。きっと、土を離れるとダメなのでしょうね。

徳水さん:

旧約聖書の中に「ノアの方舟」の物語があります。この物語は、私にとっての大切なイメージの一つです。大洪水後に新しい世界が作られた、そのように、復興を街全体にもたらす。その思いで、このガーデンの北隣に、私はオリーブを植え、育てています。「ノアの方舟」の物語で、大洪水の終わりを告げるのがオリーブだったのです。ここで育てているのは「日本最北限のオリーブ」です。行政とも協力し、これが新しい産業へとつながる努力を続けています。そうした努力は、私たちだけのものではありません。このガーデンの西隣では、バス会社の社長だっ

た方が農園を始めました。「余生をそこに」と、毎日来て、汗を流しておられます。みんなで、荒地地になったこの地を緑化して行く。人々を癒す場所を、みんなで作り出そうとしています。

芳賀さん:

イングランドでは「ガーデニングが余生における最高の贅沢」と聞いています。小説であれば、アガサ・クリスティの造形したキャラクター「ミス・マーブル」がその典型ですね。「ピーター・ラビット」の世界も、そうでした。そうした豊かさが、この津波被災地・雄勝に立ち上がっている。そこに足を運べたことは、本当に幸いなことでした。

——「一人ひとり」が、自分の志を持ち、大地と共に生き、汗を流す。そうして、矛盾や不条理にもめげない・負けない生き方が実現するのでしょうか。今日も本当に、大切なことを、この場所から学びました。本当に、ありがとうございました。



「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」に行きますと、いつも、作業着姿の徳水さんがおられます。「汗を流す生業(なりわい)」の大切さを、お伺いするたびに、はっきりと思い起こさせられます。

3. 集まる仲間

「カリタス南三陸」を訪ね、そして「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」を訪ねた後、「みちのく潮風トレイルを巡礼路に。そこに、アルベルゲを！」という思いを、私（川上）は友人たちに伝えました。すぐに、いくつもの反応がありました。それでは、と、関心を持ってくださった方と集まり、話し合いました。以下は、7月7日に宮城県川崎町で持たれた会合の記録です。



――みなさま、「みちのく潮風トレイル」を「巡礼路」として展開しようという私たちの夢に、関心を寄せてくださって、ありがとうございます。自己紹介をお願いします。

松谷さん：

松谷寛元と申します。仏教の僧侶です。仙台に住んで言語聴覚士の仕事をしていたのですが、コミュニケーションに悩みや苦しみを抱えた方やご家族が「人生の旅」を歩むための休憩場所を提供できるような働きをしたいと思い、仙台市から自動車で40分の距離にある川崎町に、4年前、引っ越してきました。

大平さん：

大平直也と申します。どうぞよろしく申し上げます。

震災前のことです。私の知人が、友人がアメリカを自転車で横断しました。そのお話を聞いたとき、強い刺激を受けました。その時私は千葉県に住んでいました。それで、内房から銚子の先へと、房総半島をぐるっと回るルートで、沿岸を歩いてみました。夏休みごとに、歩きました。ちょうどその終わりが見えてくる頃です。「旭市」という海辺の町を歩いたのが「3.11」の翌年でした。その千葉県旭市は、津波の被害を受けたのですが、私たちはそこを実際に足で歩き、そして、大きな津波被災の傷跡を目の当たりにしたのです。

房総半島を歩き終わった時、「みちのく潮風トレイル」の計画を紹介する記事が新聞に出ました。「これを歩こう。一生かけても、ゆっくり歩こう。」と心に決めました。三連休がある毎に、東北へ通ったのです。そうしましたら「4年」で歩き終わりました。津

波の厳しい跡と、その復興工事の中を歩いたこと、そして、防潮堤に囲まれてしまう前の沿岸部の風景をこの目に焼き付けることができたことは、本当に印象深い体験でした。その後、ご縁を得て、宮城県村田町に職を得たのです。

芳賀さん：

福島市で教会の牧師をしています。昨年「日本アルベルゲ協会」を立ち上げました。その「中身」を求めています。皆さんと出会えたことを、心から感謝しています。



「日本アルベルゲ協会」のホームページ

私の息子が、スペインの「サンチャゴ巡礼」に行きました。いろいろと課題を抱えていた頃でした。それから息子は、ネパールの山岳ガイドと仲良くなり、ヒマラヤのトレッキングルートを訪ねました。かつて「世界で最も美しい谷のひとつ」と紹介されたその村は、2015年の大地震によって壊滅し、その谷は完全に埋まっていたそうです。そしてそのネパールの友人は「ここに、もう一度、宿（ゲストハウ

ス)を作りたい。故郷を復興させる。」と言っていた
 そうです。

そうしたことを通して「祈りの道を作りたい」と、
 息子が言い出したのが、「日本アルベルゲ協会」を立
 ち上げるきっかけでした。そうした折に「みちのく
 潮風トレイル」の話聞いたのです。この「自然遊
 歩道」を祈りと再生の場・巡礼路とするためには何
 が必要なのかを模索しているところです。

――大平さんの御名刺は、二つ折りになっていて、その中
 に「みちのく潮風トレイル」も部分的に含む

すべての津波被災地を歩いた、
 その記録が印刷されていますね。

大平さん:

印象に残る名刺にしたい
 と思い、作りました。私は、
 東北に愛着がありながら「何
 もできなかった」という思い
 を抱いていました。それで、
 津波の被災地の全てを歩い
 たのです。その中で「お祭り」
 にたくさん出会いました。そ
 の大切さを肌で感じたので
 した。でも、どこもかしこも
 人口流出が激しく、「お祭り」
 の維持が難しくなっていま
 した。これを支える仕組みを
 つくろうと、活動を開始し
 たのですが、しかし、すぐ「コ
 ロナ」の騒動になりました。
 今、その再起動中です。

大平さんの名詞。
 二つ折になっており
 開くと、右の「足跡」が
 記されています。

――「3.11」前にあったものを、
 未来へ引き継ぐお手伝いですね。

芳賀さん:

大平さんは、青森県八戸市から千葉県まで歩かれ
 たわけですね。すごい。東日本大震災の犠牲者とい
 うと「被災3県」と呼ばれる岩手・宮城・福島が中心

で、それ以外の場所、たとえば千葉県などの犠牲者
 については、あまりにも知られていません。でも、
 悲しみの大きさは、数では測れない。また、悲しみの
 深さは、比べられるものでもありません。たくさ
 んの「知られていない事柄」が、語られないままに、
 各地に残されえています。そうした悲しみがつな
 がりあい・響きあう時、何か、解(ほど)けてくるもの
 があるのではないかと思うのです。巡礼路としての
 「みちのく潮風トレイル」には大切な可能性がある
 と思いました。

そして「3.11 以前」との繋がりを支え
 たいという新しい活動を開始されている
 のですね。これも、すごい。同じ志を、私
 たちは「雄勝ローズ・ファクトリー・ガー
 デン」で拝見したのです。妻の実家は、双
 葉町にありました。それは「除染」のため
 に、取り壊されました。そうした形で、故
 郷が失われつつあるのです。でも、励まされ
 ました。今、津波と復興工事で破壊され
 た故郷を、また新しく未来へつなごうと
 する方々がいる。石巻市雄勝町にも、おら
 れたのです。そして、そうした努力を支え
 ようと志す大平さんもいる。私たちも、何
 かできるような気がするのです。

松谷さん:

ことばの障害やコミュニケーションの
 悩みや苦しみと共に生きている方々は、
 「孤独な旅人」として、人生を歩んでおら
 れます。もちろん私もその1人です。その
 方々の本当の支援をしたい、とずっと思
 ってきました。「大変だったけれど、いい
 人生だった」と、一人ひとりが思える、そ
 うした人生の終着点に行き着いてほしい
 と願っています。それもきっと、「過去と
 幸せにつながること」なのだと、そう思い
 ました。

これから、私たちもご一緒に、「巡礼」を目指した
 活動を、ご一緒させていただければと願っています。
 どうぞよろしく願います。

(2023年8月22日 川上編集)



コラム1：東北の過去と未来をつないで

「三陸」という言葉があります。これは、明治政府が作った言葉だそうです。

もともと、律令国家としての古代日本が成立したとき、東北地方は二つの「国」に分けられました。「陸奥国（むつのくに）」と「出羽国（でわのくに）」です。「陸奥国」が、現在の宮城県・岩手県・青森県に当たります。つまり、東北地方の津波被災地・原発被災地の多くの部分が、そのまま古代の「陸奥国」となるわけです。

古代からずっと時代は下り、江戸時代が終わって明治維新があって、日本全体を律令国家のイメージに戻そう、という「王政復古の大纲」が出ました。1868年のことでした。そしてその翌年に「戊辰戦争」となります。主に「陸奥国」が戦場となりました。そして、その地域を占領した明治政府は、広大な「陸奥国」を植民地のように分割再編成しました。

その結果生まれたのが「三陸」という地名でした。

もう少し、詳しく説明します。

仙台より北側、だいたい松島あたりから青森まで、後に「リアス式海岸」と呼ばれる地域が広がります。この地域に仙台周辺を加えた部分を、明治政府は「陸奥国」から分立させました。そして、このリアス海岸沿いの地域を「陸前国（りくぜんのくに）」「陸中国（りくちゅうのくに）」「陸奥国（むつのくに）」と、三つに分割したのです。それで、この三分割された地域の総称として「三陸」という言葉が生まれました。この三つの「国」の名前は、1869年から1876年まで、日本政府の公式な地名として存在していました。



6世紀

「道奥（みちおく）」と呼ばれていた地域が「陸奥」の国となる。

726年

陸奥国の管理・統治・支配のために多賀城が創建される。

1868年

「王政復古の大纲」

1869年

「陸奥国」が「陸前」「陸中」「陸奥」に分割される。

1876年

現在の都道府県が確定する。

1876年に現在の都道府県が確定し、「三陸」つまり「陸前国・陸中国・陸奥国」という国名は、明治政府の公式の用語としては、消滅しました。しかし、その言葉だけは今に残されています。「たった7年」しか存在しなかった言葉です。しかし、それが今でも根付いている——そこには「戊辰戦争」の後に植民地化された東北の呻きのようなものが感じられます。

「陸前」の沿岸部（今の仙台から釜石辺りまで）はすべて、2011年の津波の被災地となりました。その「復興」の難しさを、現場を訪ねて学ぶ私たちは、痛感させられています。しかし同時に、その現場で尊敬する人々が、過去と今をつなごうと、汗を流しておられる、その姿に、励まされるのです。その励ましに背中を押され、「陸前」の内陸部にまで視野を広げながら、私たちも、過去と今をつなげて被災地を見つめます。すると、何か「復興」の可能性が見えてくる気がしてくるのです。

「陸前」の内陸部は、北上川とその支流域となります。この地域とリアス海岸の沿岸部全体を視野に入れ、そしてその歴史を紐解きますと、約1200年前にも、同じ困難があったことが知られます。1200年前には、もちろん、原発事故はありませんでした。ただ「大津波」に加えて「大戦争」と「火山の大爆発」がありました。



7世紀の東北で多く用いられた「蕨手刀(わらびてとう)」

まず、774年から811年まで「阿弭流為（アテルイ）と坂上田村麻呂」で知られる戦争がありました。それは「38年」に及ぶ長い大戦争となりました。それは東北の土着の民と大和朝廷との戦争でした。

ようやく戦火も収まり、戦後復興も形を見始めたであろう869年にあったのが「貞観の大津波」でした。ほぼ、「東日本大震災」の際と同じ規模の、まさに大津波でした。この時、大和朝廷は総力を挙げて津波被災地の復興に当たったことが、古文書から知られています。

さらにその後の915年、「十和田火山の大噴火」がありました。その噴煙は京都まで届き、広い地域が葛西雄によって埋没した。実は、十和田火山は長くそうした噴火を続けており、火山の山頂付近はまるごと吹き飛んで、そうして今の「十和田湖」ができていた。大和朝廷の古文書を見ますと、この頃から「陸奥国」の記録が激減するそうです。結局、植民地政府としては、いったん「手を焼き、手を引いた」のかもしれない。



「陸前」(仙台から釜石まで)の内陸部から十和田湖に向かって眺めた地図

つまり「3.11」の現場は、今から1200年前にも、半世紀ごとに起こる人災・天災に破壊され続けた現場となっていました。しかし、それは確かに「復興」したようです。つまり、その破壊の大地から、まったく新しい共同体が生まれ、それは混乱と困難を乗り越えて「平泉文化」を生み出しました。そして、その復興の土台を吸収して初めて「武士の国」が生まれ、その文化は江戸時代を経て現代まで続いていると、最近の歴史学は語っています。

過去を現在につないで未来を見るとき、「復興」の困難も乗り越える新しい可能性を捉えられるかもしれない。そんなことを、考えています。

想いは響いて（渡波と鮎川から）

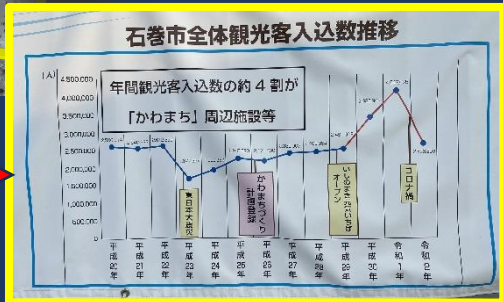
「みちのく潮風トレイル」を「雄勝町」から南下しますと、「女川町」を通って牡鹿半島へと延びて、震源地すぐそばの「鮎川地区」へと進みます。その途中、ほんの少しだけですが「女川原発」も見えますのです。

そのすぐそばに「渡波（わたのは）地区」があります。津波の被害のひどい地域でありながら、そのまま再居住が許された、あまり例のない地域です。

石巻市街地の起点には「いしのまき元気市場」があります。そこにあった横断幕は、この地域の課題をよく示していました。



「いしのまき元気市場」には、復興事業の成果として観光客が急増した後、「コロナ」騒動によって元の水準に戻ったことが折れ線グラフで明示されていました。



「みちのく潮風トレイル」は、「いしのまき元気市場」から北上川をさかのぼります。朝の澄み切った空気の中で歩きますと、まことに清々しい道でした。

この夏、「渡波地区」と「鮎川地区」を訪ねましたので、以下にそのご報告いたします。被災地が被災地と響きあい、また、被災地の今が過去の痛み現場と響きあっている。そんな様子をご案内できればうれしく存じます。

(2023年8月22日 川上直哉 記)



近代文化遺産「石井閘門」のそばで。「みちのく潮風トレイル」の標柱が歩く人に経路を示しています。



「みちのく潮風トレイル」は、石巻市街で北上川と北上運河をたどります。

1. 「Love is Action」の緑化事業

「ひとりの人の想いは、馬鹿にできない。大きな力を持っている」と、「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」で、語り合われました。瓦礫を撤去した後の津波被災地に「たった二株」で始まったのが、雄勝全体の緑化運動・復興への歩みになっていました。

その想いを知り、出会い、刺激された「3人」の方が、雄勝の南方20キロの「渡波」地区に、「小さなガーデン」の設営を始めました。「みちのく潮風トレイル」に沿って女川まで行き、そこから西へルートを外れて、おおよそ自動車で40分程度の場所に、その「小さなガーデン」はあります。



「渡波」地区も、「雄勝町」と同じく、津波で広大な地域が壊滅しました。そこは今、「空地」だらけの場所となりました。故郷に戻ってきた人々もいますが、やはり、離れた人も多いのです。その結果、荒涼とした雰囲気は固定されてしまったようにも、思われます。

「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」の「最初の二株」は、津波被害を蒙った大地と空が「寂しい」と語りかける、その声を聞いた徳水利枝さんが植えたものでした。そうして展開した徳水さんの想いに共感・共鳴した三人の方々が、「ラブ・イズ・アクション」という団体を立ち上げました。三人は「渡波」地区の空地を一つ借り受けて、緑化運動の準備を始めたのでした（その最初の様子は『ニュースレター2022年イースター号』の「あとがき」にご報告していました）。そして今年、更地になった元・住宅地を耕し、種を植え、雑草をむしり、庭づくりは、始まりました。



2022年3月 まだ「更地」のガーデンを前に

ある時、私は、「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」を訪ねて、徳水さんご夫妻に、この「新しい庭づくり」のことを、お伝えしました。徳水さんは「きっと、その志は、実現します」と、静かに応えてくださいました。その時の真剣な顔を、私は忘れることができません。

(2023年7月30日 川上 配)



2023年7月の様子。
ガーデンの姿が見えてきました。

2. 子どもたちの未来を拓く

石巻市の主要産業は、漁業（養殖を含む）と海産物の加工業です。缶詰や乾物などの加工工場が集約している場所が、「渡波（わたのは）」地区です。たくさんの工場がありますから、「日銭」を稼ぐお仕事がたくさんある場所です。

「3.11」の時、巨大な津波が「渡波」の町に襲い掛かりました。そこにたくさんのボランティアが訪れました。そうした中で、ボランティアセンターが生まれ、そしてそれが教会になって地域に奉仕が続けられる。そんな現場があります。「渡波キリスト教会」は、その一つです。

2023年6月23日、私（川上）はこの教会を訪ね、牧師の小澤倫平（こわざりんべい）さんにインタビューをしました。そこで語られたのは「被災後の日常」のリアルであり、そして「復興」を目指した地道な取り組みでした。



――石巻・渡波に移住された経緯（いきさつ）を教えてください。

私たちは香港に住んでいました。2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。そして私たちはここに移住したのです。神様が長年住んでいた香港から私たちを根こそぎ引き離し、石巻に移した。そんな風に思っています。

でも、渡波に来た当初は、この町に永住することになるとは、夢にも思っていませんでした。私たちが到着した町は、瓦礫の山・ひっくり返った車の山に満たされていました。かつて多くの家が

建っていた場所は、見る影もなかったのです。まさに「全壊の町」でした。

津波と瓦礫で一階を穴だらけにされた家の、その二階部分に住んでいる家族もたくさんいました。私たちは強く心が動かされたのです。家族や友人を失った彼らの深い悲しみの深さを思いました。私たち夫婦は、人々を愛し・支援するために、そして、石巻の復活を体験し・その一端を担うために、渡波に住むことを決めたのです。

――それから、12年経ちました。いろいろなことがありましたね。

はい。震災から5年経った2016年ころでしょうか。私たちは、渡波の人々の「震災前の姿」を目にするようになっていました。仮設住宅での生活を終えて、新しく建てられた家へ無事に転居できた人が・行政が提供する団地へと移って新しい生活を始めた家族の姿をたくさん見ました。



現在の「渡波」の町（『石巻日日新聞』2023年3月14日）

そして、「震災前の姿」が復旧してきたのです。それは、一面において、確かに、苦しみと悲しみの日々でした。つまり、崩壊した家族・貧困にあえぐひとり親家庭・虐待された子どもたち・アルコール中毒・家庭内暴力・ギャンブル（パチンコ）中毒、など、など。何でもあり、の様子です。震災からの「復興」と共に、あらゆる社会問題が浮上した。そのように感じました。

何人もの方に言われたことです。震災前、この「渡波地域」は、石巻市の中心部に住む人々から「アウトローの土地」と思われていたそうです。残念ながら、この言葉はある程度正しいと思わせられました。



石巻・渡波の海は、
養殖が盛んな豊かな漁場です。
(右の写真は「めかぶ」)

収穫の繁忙期には、今も海外の諸教会から
ボランティアチームが来てくださいます。
小澤さんたち「渡波キリスト教会」は、
そのボランティアセンターとして、
今も機能しています。

——「復興」の掛け声の下に、「復旧」が進んだ。それは決して、
明るい姿ではなかった。そういう事ですね。

私は、米国で育ちました。それで、思い出すことがあります。バラク・オバマ大統領が「アウォル＝AWOL」という言葉を使ったのです。2008年の演説でした。「アウォル＝AWOL」とは軍隊用語で"Absence without leave＝無断欠勤"を意味する言葉です。「あまりにも多くのアフリカ系アメリカ人の父親が、アウォルAWOLの状態だ」と、大統領は語っていました。そして、アメリカにおける黒人男性は、非常に犯罪率が高い。それは「父親のア

ウォル＝無断欠勤」の結果ではないか、という事をしてきたのでした。

夫や父親の「不在」によって、家庭は崩壊します。父親のような存在を知らずに育った少年たちは、刑務所で過ごす可能性が非常に高い。それは、米国で善く知られた社会問題です。そして私たちは今、石巻でそのような家族を知っているのです。どうぞ、夫や父親のいない家庭を想像してみてください。それが「復興」の渡波の現実なのです。

——今、子どもたちの未来が心配ですね。

はい。子どもたちの教育に、大きな心配を覚えています。ここ渡波の「識字レベル」は、危険なほど低いと実感しています。漁師の子どもたちは、中学を卒業するとすぐに父親のもとで働き始めます。あるおじいちゃんに、「孫を大学に行かせていますか？」と聞いたことがあるのですが、その答えは、「いや、うちの家族は誰も大学に行ったことがない。高等教育は必要ない」というものでした。このおじいちゃんの言葉に、ショックを受けました。

大学の卒業が必ずしも幸福と成功した人生への鍵のなるとは限らない。そのことは、確かです。でも、少なくとも高等教育を受けることで多くの可能性が広がることも、事実です。

そして、今私の目の前には、ここで生まれ・ここで育ち・ここで結婚し・ここで子供を育て・ここで死んでいく人々の現実があるのです。渡波の外にはまったく違う世界があることを知らないまま、一生を終えてしまう人が、実に多いのです。それは、子どもたちにとっては、ある種の危険なことだと思うのです。



——支援者としてこの地に生き、「復興」の現実を共に分かち合う働きは、

今、まさにここで展開しているのですね。



私たちの教会では、幼稚園から高校までの子どもたちに、無料の英語学習を行っています。その目標は、世界を見る機会を子どもたちにたくさん与えることにあります。もちろん、私は牧師ですから、英語学習の過程を通して、子どもたちやその家族に、神様のよい知らせ・福音を伝えたいと願っています。

——キリスト教が、支援の基本的な考え方なのですね。

はい。「復興」の現実をともに喜ぶために、私は「家族の価値観を世代を超えて受け継ぐ」という聖書の教えに注目しています。聖書は、子どもたちに人生の大切な価値観を教えるのは父親の第一の責任であると教えています。父親が子供にどのように教えるかについて、神に対して責任があること。そのことは、大切な教えだと思っています。

現実を見ますと、「子どもを教えるのは母親の責任だ」と考えている父親が多すぎます。その考え方に疑問を持たないので、男性が家庭を不在にし

ても何の問題もないとされるのです。そしてさらに問題は、母親たちが「子どもたちに教えるのは学校の責任だ」と考えていることにあります。結果、学校の教師の負担は過剰に重くなってしまうのです。

私は、子どもを教える第一の責任は学校ではなく、親にあると考えています。それが聖書の教えるところだと思うのです。書くこと、読むこと、計算することは、家庭で始めなければならない。聖書には「基礎」の大切さも説かれています。子ども

たちの基礎は、父親と母親の責任の下に、築かれるものです。それが信仰であれ、家族の価値観であれ、学業であれ、最初に基礎となる教えをするのは両親です。そしてその土台の上に初めて、学校の教師の仕事があります。

——毎日、たくさん子どもたちが教会にきますね。

だいたい、50人くらい子どもたちが、それぞれの都合に合わせて、学校が終わった後、教会に来てくれます。その子どもたちを、私たちは大切に見つめています。そうすると、気づかされます。多くの場合、両親は共働きで、子どもは放っておかれています。放課後の「自童クラブ」はあるのですが、残念ながら、デイケアサービスとして機能しているに過ぎないようです。

子どもの人格形成には親の役割が不可欠なのだと思うのです。親からよく教えられた子どもは、同じように教える親になります。親から見放された子どもは、大人になったとき、自分の子どもを見放すことになるでしょう。

——大切な働きですね。継続にはご苦労もあるかと思います。

実際、ここで大切なことに気づいてくれた、と思う子どもが、翌日には「元に戻っている」という事が、たくさんあります。やはり、子どもの教育には「家庭」が第一なのです。そこに足りない何かがあるとき、それを補う事は、とても難しい。でも諦めずに、丁寧に続けて行きます。英語教室は、無料です。無料だから、たくさん子どもたちに出会えるのです。親御さんたちからの信頼も、少しずつ獲得できてきました。継続のためには資金も必要ですが、私たちの活動を理解して応援して下さる方々が、国内外にいてくださって、支えられています。神様の働きだと思います。この夏も、毎日子どもたちと過ごしています。大切な働きをお預かりしていること、感謝しています。

子どもたちの教育の第1位は家庭、第2位は学校。そして第3位は、例えば私たちの渡波キリスト教会であればと願っています。そして、私たちの教会で、第一・第二の教育の場の不足を補いたいと願っているのです。



私たちは、子どもたちを大切にして、子どもたちに「あなたは大切なひとりですよ」と伝えたい。そして、人を傷つけない言葉遣い、自分を守るための礼儀、友だちと仲良く過ごすマナーを、丁寧に教えたい。それから、英語に慣れて、得意になってほしい。そうしたら、きっと、世界は広がります。



3. 石巻平和七夕（鮎川と広島と）

「渡波地区」から海を渡る橋がかけられ、その先に、「牡鹿半島」が広がっています。日本列島の本州で、いちばん深く、太平洋に喰い込んでいる半島です。従いまして、東北沿岸を襲った東日本大震災の震源地に最も近いのが、この「牡鹿半島」の先端、という事になります。その先端部にあるのが「鮎川」地区です。

「鮎川」地区に、今年は7月19日から8月10日まで、「石巻平和七夕」が展示されました。仙台で有名な「七夕飾り」を、石巻でも、みんなで作って飾る。その「七夕飾り」の吹き流しの部分を、「折り鶴」で作る。市民に呼び掛けて、鶴を折っていただく。その折り鶴を糸でつなぎ、吹き流しに仕上げ、「七夕飾り」とする。そうして、みんなで「平和」への祈りを形にする。――それが「石巻平和七夕」です。



「鮎川」にある「産業物産交流会館 Cotts (コッツ)」に、「石巻平和七夕」の吹き流しが飾られました。それは、現代芸術のインスタレーション「Microcosmos -Melody-」（ピンク色のカラフルなピアノ）と並べての展示となりました。とても不思議な空間が出来上がりました。

この「石巻平和七夕」は、折り鶴に「平和」への想いを込めるものです。なぜ、折り鶴が「平和」を象徴するのでしょうか。――その答えは広島にありました。

2023年8月6日、私は広島に行きました。市内で開催される「平和の集い」に登壇するよう、ご招待を頂いたのです。この機会を活かして、リニューアルしたという「広島平和記念資料館」を訪ねました。資料館の順路の終わりの方に、素晴らしい折り鶴が展示されていました。ここに、「平和七夕」の原点がありました。

資料館が展示していたことは、次のようなことでした――広島に、佐々木禎子さんという女性がいました。1943年に生まれ、2歳の時に、広島原爆の爆心地から1.6kmの地点で被爆しました。原爆の被害は、三つあります。第一に、熱線。第二に、爆風。そして第三に、放射能です。幸い、佐々木禎さんは、熱線と爆風を、ある程度、免れたようです。しかし、避難する途中、放射線に「被ばく（被曝）」しました。それでも10年間、元気に過ごしたのです。しかし、突然、白血病になり、入院を余儀なくされます。佐々木禎子さん12歳の冬の出来事でした。

その直前の秋まで元気な小学生6年生だった佐々木禎子さんは、入院し、中学に通う事もできなくなりました。その闘病期間中、名古屋から「折り鶴」が届き、入院患者の皆さんを励ましたそうです。そして佐々木禎子さんも「折り鶴」を作り始めます。「千羽鶴」を、病気からの回復を願って、作り始めます。それでも、その体は回復することなく、12歳の秋、その生涯を終えたのです。



広島平和資料館に展示されている「禎子さんが折った鶴」。病のために禎子さんは指が不自由になり、最後には針で小さな折り鶴を作ったそうです。

この佐々木禎子さんの出来事は、人々に語り継がれました。核・原子力がもたらす放射線の被害の深刻さ・放射能の脅威が、語り継がれました。そして平和を祈るシンボルとして「折り鶴」が受け継がれ、「石巻平和七夕」まで、それは引き継がれたのです。

津波の被災地に、広島の放射能被害を伝える「折り鶴」が飾られている。「3.11」の震源地の一番近くに、それは飾られている。それは、私たちの思いを「福島原発事故」の現場へと向かわせます。そのようにして、「東北」と「広島」がつながり、「原爆の被害」と「原発の被災地」がつながる。過去を未来へとつなげる一つの起点として、「石巻平和七夕」がある。そんな風に思われました。

(2023年8月9日 川上記)

コラム2 過去と未来のつなぎ方

南三陸町に「田東山（たつがねさん）」という霊峰があります。日本に天台宗が伝えられてから半世紀もたない「承和年間」（834～848年）に天台宗の寺院が建立され、修験道の中心地として長く栄えたそうです。古い地層の山で、砂金がたくさん採れた場所とも伝えられています。

この「田東山」西から北へ回り込むようにして、内陸側から海岸線に向かって国道346号線が走っています。「西郡（にしこおり）街道」とも呼ばれるこの道は、石巻市から秋田健湯沢市をつなぐ長大な国道の一部になっています。国道から見て田東山の向こう側・海側は、あの日、津波で壊滅しました。2011年の東日本大震災の際、たくさんのボランティアが、この「西郡街道」を通して被災地の支援に入りました。



この西郡街道に、「藤沢大籠線」という県道がつながっています。昔、この「田東山」を奥州藤原氏が保護・管理・支配していた時代に、平泉から政府要人が下ってきた道でした。今でも、この道を北西に進むと、世界遺産「平泉」となります。



「西郡街道」と「藤沢大籠線」の接続する地点に、江戸時代を通じて記念碑が置かれ続けた一角があります。「地藏の辻」といいます。200名に及ぶキリシタンが1639年に処刑された「大籠大殉教」の場所として、岩手県一関市藤沢町大籠という集落に長く伝えられている「殉教地」です。

1639年とは、どのような年でしょうか。

それは「島原の乱」収束の翌年です。

1637年に九州の島原・天草地方で巨大な一揆が起こりました。同年12月、一揆勢は武装蜂起を起こし、原城を占拠します。幕府軍は九州の大名による連合軍を編成し鎮圧にあたりますが、その総大将である板倉重昌が戦死する等、苦戦を強いられます。4か月に及ぶ戦争は、全国の大名によって再編成された幕府軍が勝利します。10万人以上の兵力を動員し、オランダ軍の援助も受け、1万人ほどの戦死者を出しつつ、一揆勢を皆殺しにした勝利でした。

この幕府の苦戦の背後に、全国の「キリシタン」のネットワークがあったと言います。一揆勢は海に向かって大手門を開いた原城を拠点に兵站を確保し、全国から集まるキリシタンと呼応してゲリラ戦術を展開したのでした。

この「ネットワークをつなぎ活かす力」つまり「一揆させる力」に脅威を感じた徳川幕府は、その後、キリシタン禁令を全国各地で厳格に行うこととなります。そして「島原の乱」の翌年から、大籠村でも大殉教が起こることになるのです。

大籠は宮城県と岩手県の県境にあります。このあたりは寒く、20世紀後半に「品種改良」される前の稲では、収穫がほとんど見込めません。すべてが「米」で計られるのが、江戸時代の経済の特徴です。つまり、この地は「不毛の地」と見做される場所でした。しかし、そこに「製鉄」の産業が興ります。それはキリシタン

によって導入され広がりました。「製鉄」は木炭を製造し・木炭製鉄炉で砂鉄を溶かし・精錬して鉄として出荷して・デザインを施して製品とし・人口密集地・大都市で商いをする、という事業です。山深い森林地帯から大商業都市まで、広大なネットワークを一つにつなげることが、必要となります。「島原の乱」に力を示したキリシタンのネットワークは、「不毛の地」を大都市とつなげて製鉄産業を興し、人々の生業（なりわい）を支えるものとなりました。特に製鉄所があった大籠は「キリシタン宗」が大流行した様子です。キリシタンの神は、当時、「流行り神」と呼ばれたそうです。修験の聖地であった田束山の僧侶も続々改宗をし、衝突も起こっていたと伝えられています。

そして、「島原の乱」があり、そして「地蔵の辻」での「大籠大殉教」となった。

この「地蔵の辻」から「西郡街道」に出て、そのまま西に向かいますと、右手に小さな祠（ほこら）が見えてきます。標柱には「流れ不動」と記されています。

大籠から「地蔵の辻」を経て「二股川」が流れています。この川は、この祠のある場所を経て、北上川にそそぎます。その上流に位置する大籠から、一体の「お不動様」が、この祠のあるところまで流れ着いたのだそうです。

なぜ・いつ、不動明王像が流されたのでしょうか。

答えは「大籠キリシタン殉教資料館」にありました。資料館の一角に「寺社の位置図」というパネルが掲示されています。そのパネルによると、「元和年間」から「寛永年間」の間（1615～1643年）に神社・寺院の宮司・住職が追い出されたとのこと。この期間、京都（1619年）、長崎（1622年）、そして江戸（1623年）で切支丹の大規模な公開処刑が行われ、そして1637年に「島原の乱」が起こったのです。

関東以西でキリシタン取り締まりが激しさを増したこの時期に、伊達領の北方にある大籠では、キリシタン宗が拡張し、お寺と神社を圧迫していた。そして不動明王像も川に流された。

キリスト教の拡大を喜び、あるいは「いい気になって」しまった結果、それ以前にあった人々の営みを、クリスチャンが破壊してしまった。そしてそのことも深く影響し、西日本でのキリシタン弾圧は遂に東北におよび、そして大籠の大殉教が起こった。――殉教地は、その悲劇を通して、私たちに大切な教訓を残してくれていました。私たちは過去につながり、そして学ばなければならないと思います。

今回のニュースレターの作成を通じて、「復興」とは過去と今をつなげ、過去を未来へつなぐことだと学びました。その際、ただ「つなげばいい」というわけではなさそうです。過去につながることで、私たちは学び、新しくならなければならない。そうしなければ、「復旧」にはなっても「復興」とならないでしょう。例えば、キリスト教を拡大したいと願う人々が、たくさん、大籠を訪れてくださいます。そこで学び、新しい自分になることが、できるかどうか。あるいは例えば、今、「3.11」被災地にある女川原発も再稼働をしようとしています。私たちは、あの出来事を、どう、未来につなげようとしているのでしょうか。

――復興とは、過去と未来をつなぐこと――

その「つなぎ方」を考えると、大籠に保存された過去の史跡は、今、私たちに語っているように思われます。



http://miyagi-yonekawa.com/pdf/yonekawa_25.pdf



「流れ不動」の祠の中には不動明王が安置されていました。

「みちのく潮風トレイル」の南の先に

南三陸町から南下した「みちのく潮風トレイル」は、福島県相馬市で終わります。その南側に、「原発強制避難地」を抱えた自治体が続きます。

「3.11」の被災地をたどる巡礼を考える場合、この「南の先」は、非常に重要なものとなります。

『みちのくに みちつくる』という漫画があります。2016年に発行された、作者の「しまたけひと」さんの作品です。その冒頭に「この作品は、取材を元としたフィクションです。現在、環境省と地元住民の方々が協力して東日本大震災の被害地復興を目指し開設しようとしている『みちのく潮風トレイル』。その青森県八戸市から福島県相馬市までの海岸線の道約700kmを、作者自身2013年10月と2014年3月の二回にわけて取材し（徒歩約600km、一部地域鉄道・車を利用約100km）そこで見た景色、聞いた話、感じたことを元とし、描いたフィクションの漫画です。」と記されています。



その物語の冒頭、「鬼を宿した若者」が登場します。世界に絶望し、人間を恨んで生きている若者です。物語の中で、その若者も、「みちのく潮風トレイル」をたどるトレッキングに同行することになります。そして、最後、原発事故による強制避難地を前にして、この若者の悲しみが明かされます。この若者は、「みちのく潮風トレイル」の南の先で、津波の被害を受けたのです。父親と妹は「おそらく」津波にのまれてしまったようですが、原発事故での避難を強いられ、探しに行くこともできない——その若者は、フェンスで「通行止め」となっている南相馬市の国道で、自分の悲しみを語り、共に歩いた仲間と涙を流します。雨が降る中での、心に残るラストシーンでした。

「語られていない人々の痛みがつながりあう道」が巡礼路であると、芳賀さんはおっしゃっていました。そのイメージの原型が、漫画『みちのくにみちちくる』に描かれていました。

その漫画『みちのくにみちちくる』を携えて、私は南相馬市といわき市に行きました。もう、国道は「通行止め」になっていません。高速道路も通じました。ただ、山林の道は、あちこち「通行止め」です。新しい街が建設されています。でも、そこに日本政府が設置した放射線計測器は「避難」すべき数値を示しています。矛盾が噴き出している現場と向き合い、故郷を未来へつなげようとする話し合いが、南相馬市といわき市で持たれました。以下、その様子をご紹介します。



しまたけひと『みちのくにみちちくる』双葉社、2016年。
左上は『前編』282ページ
右下は『後編』305ページ

1. 故郷に花園を

——今日は貴重なお時間を頂きます。まず、自己紹介をしていただけますでしょうか。

芳賀美智子さん:

双葉町出身の芳賀美智子です。横浜、神戸、東京と夫の仕事の関係で移り住みましたが、その先々で、看護職として地域の高齢者の方やお母さんと子ども達に関わる仕事を細々ながら続けてきました。今は、復興庁の応援職員として、南相馬市で、もう一人の保健師と力を合わせて小高区を担当し、仕事をさせていただいています。

伏見さん:

原町（現 南相馬市原町区）出身の伏見です。浪江町で働いていた時、東日本大震災に遭いました。今は、障がいを持つみなさんを支援する仕事をしています。

芳賀繁浩さん:

福島市で牧師をしています。芳賀美智子の夫です。父が小高町（現 南相馬市小高区）や飯館村で教師をしていたので、子どもの頃からこの地域を故郷のように思っていました。原発の問題にも関わりたいと考えましたが、「自分が関わってよいのだろうか、関わる資格があるのだろうか」と思っていました。これまでは、むしろ、後方から現場を支えることに徹したいと思ってきたのです。

ずっと心に残り続けている一枚の写真があります。2011年のいつ頃でしたでしょうか。一人の僧侶が、瓦礫の中で祈る姿が、広く報道されました。それを見た時、そういうことが考えられなかった自分を恥じ反省しました。何もできないのではな

い。しようとしなだけで。ずっと負債のように思ってきたのです。

今年、東京の教会を辞して、福島市の伝道所に赴任することになりました。これから、私も加わらせていただく——でも、なお、考えています。手伝えることすらできないのではないかと。邪魔になるのではないかと——でも、関わらせていただこう。

「次」へ繋げる仕事をしよう。できるだけ、息の長い仕事をしよう。そう思っています。

——東京でのお仕事を辞して、原発被災地に来てくださったのですね。

美智子さん:

子どもたちが背中を押してくれました。思い切って、最後の仕事を、故郷でしたいと思いました。でも、私の故郷の「双葉町」は、まだ、少数の人しか戻って来ていない状況でした——たぶん居住人口は100人に満たないと思います——私が故郷での仕事を探していた昨年の春頃には、まだ双葉町役場もいわき市にある状況でした。復興庁からは「南相馬市の小高区で保健師の要望があるかどうか?」という連絡があり、夫にも縁がある小高という地に神様の導きを覚え、二人で相談して復興庁に行きたいと希望を伝えました。そして故郷に近い所で、南相馬市の小高区で仕事を見つけることができました。昨年の9月のことでした。平日は南相馬市に住み、週末に、福島市の夫の所で過ごしています。

——故郷の双葉町と、南相馬市は、やっぱり違いますか？

美智子さん:

どうでしょう。今、私の現場になっている南相馬市小高区は、昔の双葉町に似ているようにも思います。

——ずっと、強制避難地となりながら、それでも立ち入りが許されていたのが「小高区」でした。他方で「双葉町」は、原発事故後、11年半の間、立ち入りも禁じられていました。



美智子さん:

はい。そして昨年、双葉町では「避難指示」が一部、解除されたのです。でも、今の双葉町を見ると、辛い思いがします。私の大切な故郷です。できれば何かしたいという思いはあります。一方で何ができるのだろうかという不安な思いもあるのは事実です。

——ご実家は、「除染解体」となったのですね。除染するために、解体され、更地となってしまった。先ほど、その場所を拝見してきました。

◆6町村の復興拠点と解除のスケジュール



『福島民友新聞』2023年3月9日



2023年7月 芳賀さんのご実家の住所。写真右奥に、初発（しよはつ）神社が見えます。

繁浩さん:

「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」に行った時の感動を、妻に伝えました。そして今、私たちは、「更地」となった妻の実家跡を、いろいろな人が立ち寄れる庭、宗派や教派、信仰のあるなしを越えて、喪われた方を悼み、癒しと再生を祈ることのできる場所にしたらどうだろうと、新しい夢を抱いています。

伏見さん:

避難を余儀なくされ、そして解体を余儀なくされたお宅があります。そして、更地になった敷地に、花の苗木を植えている方がいます。そうしなければ、どこが自分の家だったか分からなくなってしまう、何か自分達がいた証を残したい思いのようです。

美智子さん:

思い出深い実家です。すぐそばに神社があります。ずっと昔から、ここに私たちの家族・先祖が住んできた。その大切な場所です。

美智子さん:

この地域を故郷として懐かしむ高齢者の方々が、グループで集まって、新しくつくられたお庭を、自然に楽しむ。そうしたことが、小高区ではすでに行われています。双葉町でも、戻ってくる人が少しずつ増えて、いつか、そうしたことができればと、夢を抱いています。

震災前の芳賀さんのご実家の様子。写真中央奥に、初発（しよはつ）神社が見えます。



2. 原発被災地に生きる子どもたちへのメッセージ

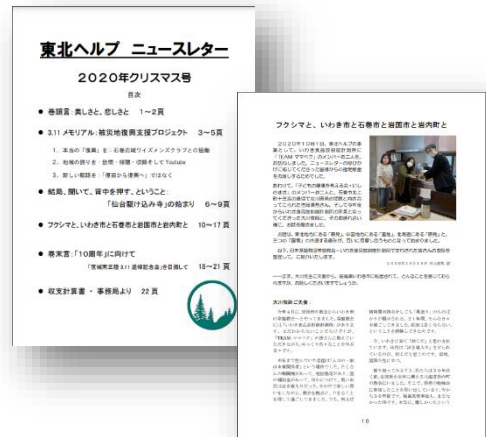
「平成23年(2011年)3月11日16時36分」から、「原子力非常事態宣言」が発令されています。今も、もちろん、その「非常事態宣言」は解除されていません。

この「宣言」の下で、様々な超法規的措置が可能となっています。人々の強制避難も、そうして行われました。北は「南相馬市小高区」から、南は「広野町」まで、福島県の太平洋側に、帰還困難区域が設定されました。この「広野町」の南に「いわき市」が広がります。「帰還が困難」とされる場所に隣接して、「定住可能」な場所が突然広がる。それは理不尽です。たくさんの「お母さん」たちが、子どもを守るために、自発的に横につながり、具体的に行動を起こしました。「いわき市」とは、そうした場所です。

「お母さんたち」が起こした具体的な活動は、今も続いています。私たちの「いわき食品放射能計測所・いのり」が、その拠点として活用いただいています。

2023年5月1日、「いわき食品放射能計測所・いのり」で活動続ける「TEA ママベク」のお二人・千葉さんと内田さんを、久しぶりに、お訪ねしました。「工学博士」の学位をお持ちの牧師である中野正義先生と、福島市で牧師をしている大島博幸先生がご一緒くださいました。

今回は特に、「いわき市役所」と連携をとりながら進められる放射線・放射能の計測と除染の活動について、千葉さんと内田さんにお話を伺いました。以下は、その抜粋です。



TEAM ママベクのお二人には、もう複数回、ニュースレターにご登場頂いています。特に「2020年クリスマス号」では、詳しいお話を伺っていました。ぜひ、改めて、ご高覧頂ければと願います。

<https://x.gd/rzVAV>

――改めて、いわき市で子どものための放射能計測を始めた時の思いを、お話しくださいますか。

千葉さん：

放射能を測るべきだと、2011年5月に、個人として、考えました。計測のための機械がありませんでしたが、支援者に助けられました。

不安に思うあまり夫から精神病扱いされるなど、母親の苦悩を目の当たりにしたこと、子どもへの影響を懸念したことなども測定活動を始めるきっかけでした。

――そして、12年の時が経ちました。振り返って、どんな日々でしたでしょう。

千葉さん：

私たちは、2013年に、行政の指導を受けながら、子どもの環境の測定をスタートしました。そして、市の許可を得て小・中学校、幼稚園・保育園、公園などの測定をして、今年で10年になります。国や

行政の計測は不足が多いため、私たちは独自の方法で詳細なモニタリングをし、データにまとめて教育現場と行政に報告し、行政にはホットスポットへの対応をお願いし続けてきました。行政との協議は、実に、簡単ではありません。何しろ、国の基準からすると、今のいわき市は「大丈夫」となってしまうのです。でも、土壌の放射能汚染を見れば、決してそうは言えない現実があります。そのことを、ずっと訴えてきました。

――空間の放射線量を測って問題なければ、それで「大丈夫」という事になる。それが今の状況ですね。

中野先生

しかし、土壌が汚染されていたら、被ばくの危険は残るわけです。そして、土壌の汚染は、土壌の

状態・環境の状況によって、空間で計測される放射線量に反映しないことも、当然ある。土壌そのものの汚染状況を見て、それを取り除いて初めて「除染」と言えるはずですが・・・。

千葉さん

「除染は終わった」と、とにかく、そう言いたいのでしょう。でも、それを「加害側」の立場から言われる。「地域の大切な子どもを守る」という目的

——これまでの計測データはすべて行政に報告されていると伺いました。そして、その記録を冊子にまとめて発刊されたとのこと。放射能を計測し、記録し、残す。その地道な活動への思いを教えてください。

千葉さん

はい。なにもないことを心から願いますが、例えば将来、健康被害が生じた場合、事故の加害側に対して権利を主張するためにも「ここにこれぐらいの汚染があった」という記録を残すことはとても重要です。後々の証拠になるように、記録を残し続けたいと思っています。

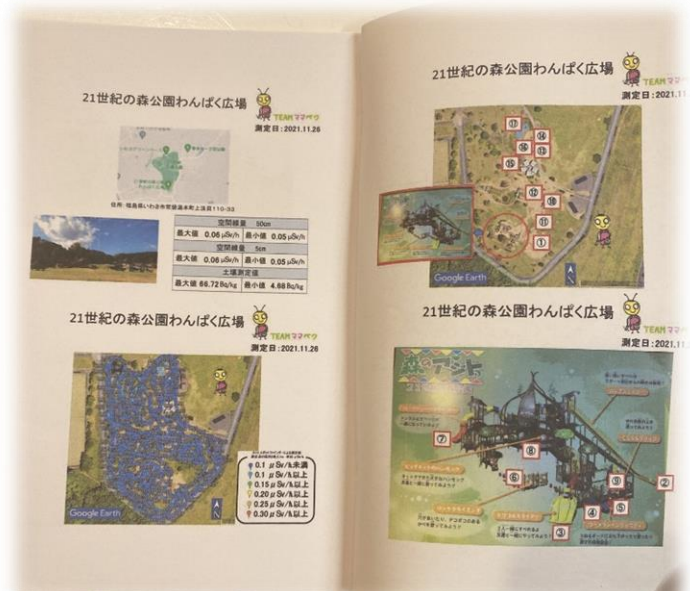
また、被ばくの危険の中で育った子どもたちは、もう、大人になりつつあります。その子どもたちに、「大人は何もしなかった」と思ってほしくない。力が足りず、申し訳ない思いでいっぱいではありますが、子どもを必死で守ろうとした動きもあったと、その足跡を残しておきたい。みんなで、それを残して、後の世代に伝えたい。そう思っています。

のためには地方自治体と、母親である私たちは、一緒にやれるはずなのです。

行政の方々には「自分たちを悪者にしていいから。うるさい親がいて、困っているのだと、その様に言ってもらって構わない」と申し上げています。そのようにして国と折衝していただければ、地方自治体の行政職員の皆さんと一緒に子どもの人権を守ることができるのではないか。そんなことを考えて、毎日、コツコツと活動を続けています。



ママベクさんが計測し続け、必要を見つけて行政に除染をお願い続けた、その記録は、下のような冊子にまとめられました。(上の写真の手前が冊子を手にする中野先生、奥がママベクの千葉さん。)



—このデータが長く保存・保管されるといいですね。

千葉さん:

いわき市が、このデータを永久保存し、未来に生かしてくれたらと、私たちは願い、求め続けてきました。そうしましたら、なんと、「この活動を、もっと市民に伝えたらどうか」と、市の側から言ってくださいました。2022年7月のことでした。正直、驚きました。そこから話し合いが展開しました。そして、いわき市のホームページに私たちの活動の記録を掲載するというお話が進み、2023年7月にママベクのリンクを貼っていただくことが叶いました。市議会議員もその話し合いの現場にいてくれまして、サポートしてくれました。

—そこまで、行政の方々と、良い関係を構築されたのですね。

千葉さん:

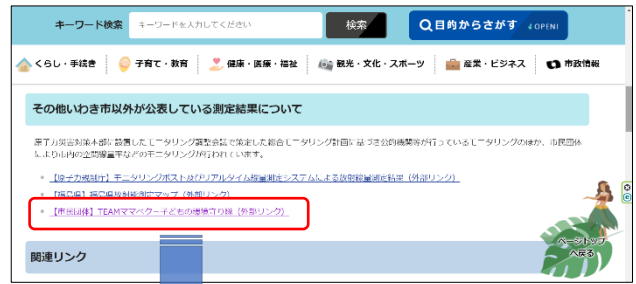
「私たちは、いわき市の職員の皆さんと一緒に歩みたい。そのために尽力したい」とお伝えし続けました。「子育て中のお父さん」も、行政職員の中におられました。そうした方々に、私たちの誠意が伝わったのかもしれない。

内田さん:

3年前の行政との協議の場で、担当課長が出席してくださり、挨拶の言葉の中で、ぐっと、歩み寄りを感じさせてくれたことがありました。とても驚いた覚えがあります。



「いわき食品放射能計測所・いのり」での会議の様子。
(計測所は日本基督教団常磐教会の中にあります。)
左手前から時計回りで、大島牧師・内田さん・千葉さん・中野牧師



上:いわき市ホームページ「いわき市放射線量マップ及びモニタリングポストの測定結果について」の中に、ママベクさんのホームページへのリンクが貼られました。

中・下:
ママベクさんのホームページの中で、公園や通学路などの放射能汚染状況が確認できます。



千葉さん:

行政との協議の際にはいわき市の5つの課の担当者が出席し、話し合いを行います。いわゆる「縦割り」の行政組織です。5つの担当課は、それぞれ、対応が違います。その時の責任者の個性も、はっきりと反映してきます。

市議会、県議会議員の中にも、私たちの協議にいつも参加して下さったり、県への申し入れにも同行して下さる方がいます。現場に立たなければ見えないことばかりですが、要望や提案の根拠を分かりやすく伝えるため、写真を多く用いるなどデータづくりにも力を注いでいます。詳細な実態を伝えることにより「関われば関わるほど、これは重要だ」と言ってくださいます。

中野先生

「継続」し続けておられることが、すごいことだと思いました。実に、びっくりしました。いろいろな支援活動がありましたが、たいてい、12年もすれば、くたびれていきました。そうした中で、この情熱って、何と、すごいなど。そして今も、行政との繋がりを広げておられます。実際、それがないと、何も動かないはずで。行政と力を合わせて活動を続けていることが、本当にすごいと思います。

——今日は、いわき市での「放射能災害」に対する地道な活動について、貴重なお話を伺いました。皆さんから、コメントを頂きたいと思います。まず、中野先生、自己紹介をお願いします。

中野先生：

はい。仙台市にある泉聖書バプテスト教会で牧師をしています。もうすぐ引退、という年齢です。大学は工学部を卒業しまして、金属材料の研究で博士号を取得しました。放射線については、直接に取り扱っていないのですが、大学院の近い仲間がその専門家になって行きましたから、少し学んでいます。

福島原発の事故が起こった時、郡山の教会にお見舞いに行きました。その時、街の雰囲気が仙台と全く違っていたことに驚きました。2011年の年末でした。「この苦しい現場に、自分は何かできないのか」と自問しました。

仙台市内にも放射性物質は降り注いでいました。原発事故直後、私の庭では「2マイクロ Sv/h」だったのです。恐ろしい高さの放射線量でした。でも、そのことの問題に気付きながら、何も言えなかった自分がいました。もし孫が自分と一緒に住んでいたら、何か問題提起をしたと思うのです。そんな自分が恥ずかしかった。

それからずいぶん経って、郡山市の木田牧師から、「福島県キリスト教連絡会」の放射能問題学習会に誘っていただきました。参加して、学ばせていただいています。課題は見えるのです。しかし、それでどうしたらよいのかと、思案していました。特に、行政を動かさなければ、どうにもならない。でも、そんなことは不可能だ・・・と、フラストレーションが溜まっていたのです。そうして今日、お二人に出会うことができました。

私は福島県人ではない分、きっと、緊迫感がないのだと思います。恥ずかしい。でも、何かできればと願っています。しかし、私には何もできないのではないかと——でも、愚痴は、聴けます。なにしろ、私は牧師なのですから。

千葉さん：

行政との協議は、難しいことばかりでした。まずは「母親は感情でものを言う」というレッテルを取り払うといった、主張の内容以前のことに力も注ぐなど、今思い出してもほんとうにいろん

な取り組みを重ねてきたなと思います。最初、学校の先生たちは「どんなモンスターたちが来るのか」と怖がったことでしょう。でも、校長先生の中には「原発に腹を立てている人」も多かった。そうした人々と出会いながら、少しずつ、私たちの活動への理解も進んできたように思います。

しかし、私たちの取り組みを阻む障害は最も身近なところがありました。「自分の子どもだけを守っている、人と違うことをするな、社会問題になど関心を持つな」という、社会を成長させるための動きを邪魔する夫に悩まされたお母さんたちの苦しみを、私たちは、本当にたくさん聞いてきました。

中野先生：

でも、こうして数値が示されることで、いろいろな変化も起こせるでしょう。たとえば、いわき市は、皆さんが集めた資料を見て、何と言われるのでしょうか。ここには、はっきりと、汚染状況が可視化されていますね。

千葉さん：

こうした資料を見て、とても厳しい反応をされた方もおられました。「たいしたことではない」と断言された方もおられます。「責任をもって言える。これは、問題ない」と。でも、ガイガーカウンターが警報音を鳴らす放射線量は、「震災前」の5倍もあるのです。その数値を超える放射線量が、子どもたちの環境中に確認されている。そのことを、私たちの活動は明らかにしました。私たちは原発事故の被害者なのです。その立場に立つなら、「これは問題ない」と言われても、納得できるはずがありません。そう伝え続けました。子どもを直接知っている私たち「お母さん」の訴える声です。いわき市は、きっと「厄介だ」と思いながら、かもしれないのですが、それでも付き合ってくれました。それは、すごいことだと思うのです。

中野先生：

千葉さんの、その情熱は、どこから湧いてくるのでしょうか？

千葉さん

悔しい、という思いかもしれません。これまで大切にしてきた多くが奪われました。事態の深刻さを前に「もう、これまで通りには育てられない。できる限りの防護をして最善を尽くしていこう」と覚悟を決めた事故直後の母親としての決意は忘れてはいけないと思っています。「これまでできたこと」を制限しないと、子どもを被ばくさせてしまう。そう思って最低限の努力をしていると、「不安に思う、あなたはおかしい」と責められる。「予防原則は、どこに行ったのか」「当たり前のことを、どうして、語れないのか」と、悔しい思いをずっとしてきました。情熱が湧くとしたら、あるいはきつと、そうした悔しさを体験し続けたからかもしれません。また、この社会に生きるひとりの大人として、原発事故という最悪の事態を招き、子どもたちに無用な被ばくをさせたしまったことへの責任、環境を汚してしまったことによる次世代への責任も強く感じています。

内田さん:

私も、悔しさを噛みしめてきました。私は震災直後、茨城県土浦市に避難して子育てをしていたのですが、そこは福島県と同じ放射線量でした。子どもたちは鼻血を出しました。それまで見たことのない鼻血でした。しかし「鼻血は被曝の影響によるものではない」とマスコミを通して全否定されました。悲しい気持ちになりました。似たような悔しい思いをたくさんしながら「信じられるのは目の前の子どもの事実のみなのだ」と思うようになりました。

そして、いわき市に戻り、千葉さんに出会いました。「知らなかった不安」を克服するために「知って安全を守る努力」を尽くす大切さを知りました。本当に、それは良かったと思います。

大島先生:

埼玉県から福島県に赴任してきました。もう福島市在住が5年になります。引っ越してすぐ、自分の住居の敷地で「0.8 マイクロ Sv/h」という放射線量が出て、驚きました。でも、それを伝えると、福島市の方から「まだそんなことを言っているの」と言われる。そんな現実、面食らった思

いがしました。でもそれが現実です。これをまず、受け入れなければならない。そう覚悟を決めて、福島市にお住いの方々のためにできることを探そうと思って牧師の仕事をしています。

幸い多くの支援に支えられて、「ホットスポットファインダー」のような機械があり、見えない現実を数値化することができます。ゆっくり、この現実を自分のこととして受け止めることができるようになってきました。そして最近、福島市に放射能計測所を開所することができました。

内田さん:

いわき市にある私の実家の土壌も、事故当時「2万 Bq/kg」以上の放射能がありました。行政に相談しましたが、「土には基準値が無いので汚染土は自分で除染して下さい。土を置くなら隣との境界線から1メートル離して下さい」と言われただけでした。結局自分では何も出来ていません。でも、あきらめず、できることを続けています。今も庭の放射能を測り続けています。そうすることで、12年の変化もわかります。「見ないこと」の不安からは、解放されています。私は、目を伏せる事無く事実を受け止めその推移を見ていきたいのです。それがいつか、これからの何かに役立つようになれば、本当にうれしく思います。

——福島市といわき市でも、

ずいぶん、違いがありそうですね。

大島先生:

そもそも、今の福島市役所には「除染課」はなくなっています。

千葉さん:

えー！本当ですか。信じられません。

大島先生:

私の自宅の土壌から、一昨年に「14万ベクレル/kg」の放射能を検出しました。福島駅から直線距離で1kmの住宅密集地です。でも、福島市には「除染課」は無くなっていたので、結局、東京電力と環境省が来て、土壌を撤去して「もう安心ですから」と語ってお帰りになりました。つまりそれが「県庁所在地」らしい対応なのだろうと思いました。

空襲のなかった福島市ですから、今でも住宅地には細い路地が無数に伸びています。それで、除染ができなかった場所がたくさんあるのです。結果、路地で「1 マイクロ Sv/h」の放射線量が検出されることが、今でもある。いわき市で皆さんが

ずっと続けておられる活動を、福島市でも始めなければならないと思います。そういう意味で、この6月に開所した新しい放射能計測所の価値は大きいのだと思うのです。

(2023年8月4日 川上 編集)

コラム3：過去を未来につなげなければ

<https://x.gd/wrBXr>



東北ヘルプ「ニュースレター」2021年秋号にご紹介した通り、2021年6月の計測結果によると、大島牧師のご自宅の土壌から「14万ベクレル/kg」の放射能が確認されました。その後、東京電力がこの土（とその下の土壌全体）を調べ、結局「8万ベクレル/kg」程度の土壌であるとの結論を出されました。



「8,000ベクレル/kg」より大きな数値を示す放射性物質は、国の指示の下、嚴重な管理を要求されます。その物質の周辺は立ち居禁止となり、通常なら、警察も出動することになります。

しかし今は、「原子力非常事態宣言」下ですから「問題ない」ようです。

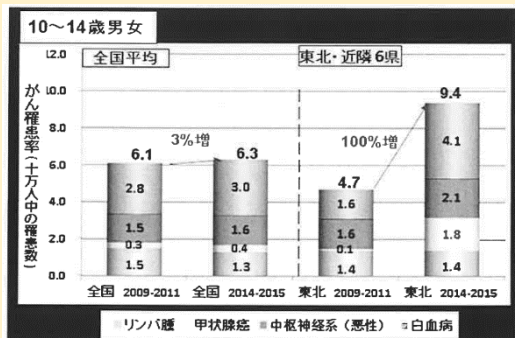
2023年7月31日、私は双葉町を訪ねました。双葉駅の内陸側には、新しい美しい町が作られていました。その駅の反対側にあるモニタリングポスト（日本国政府が設置したものです）は、空間放射線量が「0.283 マイクロ Sv/h」であると表示していました。世界中のどのガイガーカウンターでも、およそこの数値であれば、「退避」を呼びかける警報音が鳴ります。



しかし今は、「原子力非常事態宣言」下ですから「問題ない」ようです。

双葉駅は、福島第一原子力発電所から「約1.6 km」離れています。広島佐々木偵子さんも、爆心地から「約1.6 km」離れたところで、放射線に被ばく（被曝）しました。元気だった偵子さんは、被曝から10年後に、突然、白血病を発症しました。

東京電力福島第一発電所爆発事故の、健康への影響は、どうなっているのか。「ただちに健康に影響はない」と繰り返されたアナウンスを思い出します。「ただちに」ではなく、「12年経ったら」どうなったのか。



『いのちと霊性』教友社、2023年、305頁

2023年に、私は一つの講演を書籍に採録して出版しました。その最後に、私は「2015年時点で、原発事故に関連して、がんの発生率に異常が見られる」ことを記しました。しかし「2015年」から、その分析のための元のデータが見つからなくなっています。「2014年12月10日」に、「特定秘密保護法」が施行されました。日本政府は情報を隠すことができるようになりました。そして、「どの情報が隠されているか」も、秘匿することができるようになりました。そのことと、がんその他の数値が見つからなくなったことと、関係があるのかどうか。私たちは、まったくわからないでいます。

過去を未来につなげなければ——本当にそう思います。しかし、それは、たやすいことではないようです。

2023年8月23日 川上記

2023年6月16日（金）午後2時から、旧 基督兄弟団福島教会にて、「福島食品放射能計測所・いのり」の開所式が行われました。

東北ヘルプが事務局を務め、福島県内のキリスト者有志で実行委員会を作り、「食品放射能計測所・いのり」は設立され、現在までその活動を続けています。その歩みは、東北ヘルプ「ニュースレター」2022年イースター号に、阿部頌栄牧師が整理して記して下さっていました。



私たちの計測所は「くすぶる灯心も消すことなく」活動することを目指しています。たくさんの方が、不安の中を過ごされています。しかし、その不安を語ることも難しい現実があります。ですから私たちは「小さく、少しずつ、静かに」活動を続けてきました。そうして仙台に計測所ができ、いわき市に計測所ができ、郡山市に計測所分室ができました。そして今年、仙台の計測所を福島市へ移設することになりました。

小さな小さな礼拝を、開所に当たって、私たちはお捧げしました。その礼拝の中心に置かれた「宣教」をここに掲載いたします。聖書の言葉にみんなで耳を傾け、そして今の世界をじっと見つめる。神様が何をしておられるのかを、みんなで静かに考えて、計測所の活動を開始する。

そんな小さなひと時を、ここにお分かちします。

(2023年8月23日 川上記)

「福島食品放射能計測所・いのり」開所式 宣教

聖書：マタイによる福音書7：24-27

「賢い者のように」 食品放射能計測プロジェクト共同運営委員 木田恵嗣 牧師

一言お祈りいたします。

聖なる天の父なる神様。

今日、こうして、この地に、
食品放射能計測所・いのりが
開設されることになりました。

あなたの聖名を崇めて、賛美をいたします。

今日、この小さな集まりの中にも、
主なる神様が共にいてくださることを信じ、
聖名を崇めて期待致します。

また、神様。

今は平穏無事に見えますけれども

私たちの内には、

様々な備えが必要であることを覚えています。

どうぞ私たちに、上からの智慧を与えて

賢く振舞うことができますように、

お導き下さいませよう切にお願いします。

尊いイエス・キリスト様の聖名によって

お祈りをします。

アーメン

20分という時間を頂いております。まず、自己紹介をさせていただきます。

この場所の東に20分ほど行ったところに、福島聖書教会があります。私はその教会を開拓し、献堂しました。28年、この地で伝道しました。今、私は、郡山市にあります郡山キリスト福音教会という教会で牧師をしております。

今日、午前中にこちらに来まして、福島聖書教会で小さな集会をしまして、その後、このあたりをぐるっと車で回りました。非常に懐かしい思いがこみ上げてきました。何と言いましょか。私が30代・40代と、結婚し、子どもを育て、一つの教会を献堂した。ここは、非常に愛着のある土地です。

今、たくさんの、福島の被災した方たちが、故郷に帰りたけれども帰れない。そういう悩みの中で、過ごしておられます。問題は、その心の中の愛着にありますね。とても帰れる場所ではない。けれども、帰りた。どうしても、帰りた。そうした願いが、ふつふつと湧いてくる。これは人間の一つの姿であろうと思います。

震災の直後、実は、この福島の地で、ここにいらっしゃる上代先生と共に、途方に暮れていました。12年前のことです。一番最初に声がかかりましたのは、DRC ネットという団体からでした。震災の支援のために立ち上げられた団体でした。その団体の方からお電話で「福島はどうなっているのだ」と聞かれました。その時に私は、「放射線量が高いとか、いろいろ言われているけれど、放射線を測ることができない。それで、是非、線量計を送ってほしい」という事を申し上げたと記憶しています。

その電話が一つのきっかけとなりまして、実はこの場所、当時の基督兄弟団福島教会に、福島市内の教団教派の違う様々な先生たちが集まりました。震災がなければ、そんなことはおそらく、なかったと思います。そんな祈り会を行

ったのです。その祈り会の中から、FCN（福島教会復興支援ネットワーク）というものが立ち上がったのでした。そのネットワークの一番最初の代表になったのが私でした。そんな形で、この場所も、懐かしい場所です。

あの震災の後、とにかくこの福島の復興のために皆で祈ろうと、集まった。今までは、震災がなければ、結集されなかったであろう様々な教会のクリスチャンたちが集められ、共に祈った、という事ですね。私の生涯の中では、記念すべき祈りの時だったと、そんな風に振り返っているのです。

今日、お読みしました聖書の箇所は、皆さんよくご存じの聖書の箇所です。「賢い人と愚かな人」のお話です。

あるとき、キリスト教主義の幼稚園に通っている息子さんが、この物語の歌を覚えて教会に来て、歌を聞かせてくれました。お隣では、新築の家が建築中でした。大工さんが作業をしていました。子どもが覚えてきた歌です。「家を建てる歌」です。最初は、とてもいいのです。でも、最後は

「愚かな人も家を建てた

・・・その家はぺっちゃんこ」

となります。そんな歌を大きな声で歌うものですから、お母さんの方が、とても、ひやひやされていた。お子さんは、覚えてきたばかりの歌です。大きな声で歌う——そんな笑い話を思い出さず、聖書の箇所です。

考えてみますと、「こんなことは、しないだろう」と、この物語を読む私たちは、思うのです。でも、このお話の舞台になっているイスラエルを旅したときのことを思い出します。ガイドさんが、広い場所に連れて行ってくださいました。「ここは、ワジと呼ばれる水無川なのです。一年に一度くらい、わずかの雨が上流が降ります

と、ここに水が溢れます。そしてその時、自動車
が立ち往生したり、取り残された人が出て大騒
ぎになったり、軍が出動したりと、大騒ぎなる
場所です。」と、お話しくださいました。

イスラエルの地方の一つの特徴なのでしょう。
まさか、ここに水があふれてくるとは、誰も思
わない。そんな場所であっても、その上流にわ
ずかな雨が降りますと、水があふれてくる。そ
ういう場所があるという事です。

「普段は、まさかそんな出来事が起こるとは
思わない平らな場所。家を建てる人も、当然、い
るだろう場所。普段は何でもない場所。まさか
そんなことが起こるとは想像もつかない場所に、
突然災害がやってくる。その災害から身を守る
ために、岩の上に家を建てる。それが賢い人だ」
と、そのようなお話が、今日の聖書の箇所なの
です。

私たちも、福島に住んでいまして、福島県に
原発が10機あるということは、知っておいま
した。けれども、その原発の見学に行った人々
は、全員「あれは安全なんだ。新幹線に乗るより
も、車に乗るよりも、安全なんだそうだと、そ
う聞かされて帰ってきました。「二重三重の安全
対策が施されている。ですから、まさか、こんな
事故が起こるとは——12年前、誰も、想像し
ないことが、実際に、起きたのです。

考えてみます。千年に一度の大地震が起きた
からだ、その様にも言われています。しかし、
そもそも、あるはずがないと考えていた地震が
起こり、あるはずがないと思っていた原発の事
故が起こった。つまり、これが私たちの人生な
のだと思います。そういうことに、私たちも備
えるべきだ。なるほど、それは必要なことだ
と思います。

今、東日本大震災から12年がたちまして、

原発の問題が飛んで行ってしまったように見え
ます。もう、すべてが解決したように思ってい
る人も多いでしょう。でも、何も解決していな
いというのが現状なのだと思います。

今年に入りましてから、私自身は一つの気にな
るニュースを聞きました。NHKでも新聞でも報
道されましたから、関心ある人は、知ってい
ることだと思います。福島第一原発の1号機
のことです。それは建屋という頑丈なもので囲
われています。その中に、格納容器と呼ばれま
す「ひょうたん型」の容器がありまして、その鋼
鉄の容器の中に、圧力容器という、一番肝心の
もの・原子炉の中心部分と言いますか、核燃料
を納めて、発熱させてエネルギーを取り出す、
その格納容器があります。その格納容器の土台
にはペDESTAL基礎と呼ばれる

コンクリートの土台があるのです。これで圧力
容器を支えます。この土台が、溶け落ちた核燃
料によって、溶かされてしまっている。その中
は、がらんとした空洞になってしまっている。
そんなことがわかる写真や映像が、公開され、
報道されたのでした。

どういうことかと言いますと、その巨大な圧
力容器の基礎の部分が溶けてしまっている、と
いう事なのです。本来は、そこに核燃料が格
納されているはずですが、それは溶け落ち
ました。溶けるその高熱によって、鋼鉄の圧力
容器の底が抜けて、その土台であるペDESTAL
というコンクリートの基礎の上に落ちて、
その基礎も溶かされて、空洞になっている。そ
んな現実があるという事が報道されているので
す。

「空洞の基礎に、格納容器が乗っている。
それが倒れたらどうなるんだろう。」

昨年、大島先生と二人で、第一原発の内部を
見学させていただきました。その時に、質問を
しました。特にこの数年、毎年続けて大きな地

震があったのです。その時、私自身は、震災の時よりも大きな揺れを感じました。「そういう地震が続いている今、今の原発の建屋や、その中の格納容器・圧力容器は大丈夫なのですか？」と、私は聞きました。そうすると、係りの方は「複数の地震の震度を測る計測器があるので、大丈夫です」と、何でもなしのように答えました。

でも、地震の大きさを測っているかどうか、という事ではないのです。格納容器が倒れ込む危険性はないのか、ということが問題なのです。そうしたらどんなことが起こるのか。それを聞きたかったのです。でも、話は噛み合う事がありませんでした。

そうしたことを考えてみますと、決して今、楽観して見ていられる状況ではないと思います。そうした状況が今ここにあるという事です。

私たちは今、放射能計測所を福島市に設置しました。そんなことをして、いったい何になるのかという疑問も、当然、あるだろうと思います。福島にもともと住んできた人々は、今までさんざん測ってきましたので、「これは大丈夫、これはだめ」という知見があります。私たちも、気を付けているのです。どういうことに気を付けているかと言いますと、地元でとれた筍は食べません。今まで測って、筍で「100ベクレル/kg」という数値を超えるものが、時々、出るのである。今は、そうしたことは減りました。それでも、20ベクレル・30ベクレルという数値は、出るのである。ですから、うっかり食べることはできない。市販されているものは大丈夫かもしれませんが、ご近所からもらったものは、測ってからでなければ食べられないな、と考えています。あるいは、この辺りでは、山に行きますと「山菜の女王」と呼ばれるコシアブラが取れる。そうしたものをお裾分けとして頂くことがあるのです。こういうものも、測ってみますと、ものにもよりますが、非常に高い線量を計

測することがあるのです。そうした具合で、日常生活の中に、いろいろな危険がいまだに潜んでいるというのが、福島の現状なのだということです。

そうした中で、この福島市に計測所ができるという事は、非常に大切なことだと、私は思っているのです。実際に現実がどうなっているのか、それをきちんと知り、また、来たるべき次の災害の時に、再びたくさんの方が必要とする、そういう計測所になるのではないかと、そんな事を——もちろん、災害はない方がいいのですが——今、考えているわけです。

「私の言葉を聞いて」と、イエス様はおっしゃいます。私たちも、イエス様の言葉を聞いて、賢い生き方をする者になりたい。また、この地域に住んでいる方たちに役立つ働きがしたい。特に、福島にずっと住んでいる方たちよりも、新たにこの地に入ってきた方たちに、計測所が必要なのだと思っています。FCN（福島教会復興支援ネットワーク）の中で親しくなりました牧師たちの中で、何人もの先生たちが天に召されました。12年前の震災の直後に、そして震災後に、この福島にやってこられた先生がいます。その中で、震災後3年くらいして、二人の牧師が相次いで5月に天に召されました。一人は癌でした。もう一人は動脈乖離という病気でした。その二人を相次いで天に送った時、なんとも言えない寂しさがあり、私たちの間には、何か得体の知れない恐れがあった。この事は、正直なこととして、申し上げることができると思うのです。その逝去に、震災後の放射能の影響はなかったのか。そうしたことを考えますと、いろいろな不安が渦巻きました。そうした不安を、ただ不安のまま残してはいけません。できることをし続ける。たとえば、実際に計測を試みる。実際に、自分の身の回りを確認してみる。そうしたことが必要なのだと思います。

福島市に着任後、相次いで天に召されたその二人の牧師は、70歳を過ぎた年齢の牧師たちでした。結構、ストレスもあったのだと思うのです。何でもないように見えても、ストレスが過大にかかってくる。それがこの福島という場所なのだ、そんな風に、その時、理解しました。その福島の地に「見えないものを見えるようにする」ための助けになる機械は、必要なのだと思います。そういう意味で、基督兄弟団福島教会であった場所の一角に、新しい計測所ができた。このことの背後に、神様の不思議な導きがあり、神様がここに、そのような役割を与えて下さったのだと、私自身はそう信じているのです。

震災直後、福島市のルーテル教会の野村先生のもとに、一つのありがたいお話が舞い込みました。アメリカのルーテル教会が、6台の計測器を贈って下さるというお話でした。でも、その時、福島市の私たちには、それらを受け入れる力がありませんでした。泣く泣く、私たちとは違う所に持って行っていただきました。そして今、ぐるっと見回しまして、その6台が果たして、どれだけ稼働しているのか、と思うのです。これは使い次第なのです。

行政の機関で放射能を測ってくれる、という事も、あるのですが、だんだん、そうした場所も少なくなってきています。人々は気にしなくなっているのかもしれませんが、でも、必要がなく

なったのではないのです。ぜひ、ここに設置された計測器が活用される日々であってほしいと願っています。

先日、ここで、計測の講習会をしました。6人くらいの方が集まってくださり、計測の講習を受けてくださいました。素晴らしい光景でした。今でも関心を寄せてくださることに、心から感謝をしたのです。この場所が、此の計測器が用いられて、福島の復興のために、私たちが「賢い者」として生きるために、これが用いられ活用されていくことを願ってやみません。

一言お祈りします。

天のお父さま。この恵みの時を感謝します。
ここに集まりまして、この新しいスタートの時、共に祈り、また応援して下さる方があることを覚えて、聖名を崇めます。
どうぞ、この地に、
あなたを崇める働きが展開し、
あなたが与えてくださったこの計測器を用いて、
この地の多くの方々の多くの方々の益となる
働きが進められてまいりますよう
祝福して下さるよう、
切にお願いいたします。

尊いイエス・キリストさまの

聖名によって祈ります。

アーメン



直哉 川上

福島食品放射能計測所「いのり」開所式

会計報告

| 2023年度 | | | | 2022年度 | | | |
|----------|------|--------------------------|-----------|------------------|----------|-----------|-----------|
| | 献金件数 | 献金額 | 支出金額 | | 献金件数 | 献金額 | 支出金額 |
| 4月概算 | 37 | 478,339 | 481,911 | 4月決算 | 62 | 1,386,871 | 526,129 |
| 5月概算 | 25 | 576,389 | 750,267 | 5月決算 | 6 | 642,225 | 652,120 |
| 6月概算 | 18 | 648,782 | 642,312 | 6月決算 | 14 | 282,749 | 398,923 |
| 7/27まで | 9 | 132,630 | 581,252 | 7月決算 | 12 | 142,500 | 462,672 |
| | | | | 8月決算 | 19 | 125,547 | 347,602 |
| | | | | 9月決算 | 39 | 549,744 | 567,720 |
| | | | | 10月決算 | 17 | 130,800 | 613,584 |
| | | | | 11月決算 | 21 | 500,000 | 245,890 |
| | | | | 12月決算 | 122 | 1,244,187 | 764,751 |
| | | | | 1月決算 | 60 | 435,878 | 476,036 |
| | | | | 2月決算 | 43 | 409,844 | 620,504 |
| | | | | 3月 | 72 | 723,340 | 1,342,622 |
| 7月27日まで | 89 | 1,836,140 | 2,455,742 | 事業復活支援金 | | 1,000,000 | |
| 前年同月比 | 95% | 75% | 120% | 合計 | 415 | 7,573,685 | 7,018,553 |
| 7月 自動車修理 | | 375,000円→ | 102% | | | | |
| 進捗率 | | | | 2023年 7月27日現在の資産 | | | |
| 日数 | | 収入 <small>(献金のみ)</small> | 支出 | 通帳1 | ¥299,339 | | |
| 33% | | 37% | 49% | 通帳2 | ¥252,120 | | |
| | | (500万円の予算対比) | | 郵貯口座 | ¥2,951 | | |
| | | | | 振込口座 | ¥35,397 | | |
| | | | | 合計 | ¥589,807 | | |

2023年7月の理事会で報告された会計報告を、ここに記します。

2022年度は、献金件数415件・献金総額6,573,685円を賜りました。これに「コロナ」関連の補助金が100万円あり、とても助かりました。これらの資金によって、2022年度は「仙台の事務局の縮小」と「計測所の福島移転」を行うことができました。

震災から12年を経てなお、上記のような大きな献金をお預かりし、被災地のために用いさせて頂いています。心から感謝いたします。ただし、2017年度には1,200万円あった献金は、2018年度に940万円となり、2019年度は860万円、2020年度は680万円、2021年度は996万円と推移してきました。「コロナ」と「10周年」の影響を考慮に入れ、2023年は「500万円」の予算とし、現在、日々の支出削減に取り組んでいます。

幸い、事務局の縮小などが済みましたから、支出削減の努力は、成果を上げつつあります。しかしそのタイミングで、公用車（軽自動車）が故障し、福島計測所の施設が老朽化のため破損し、いわき計測所の計測器に不具合が見つかりました。二つの計測所については、現在「応急手当」をしてしのぎ、財務状況の改善を待っての対応（それぞれ、数十万円単位の支出を要します）を計画しています。

なお一層の支出削減に努め、なんとか、この苦境を脱したく願っております。どうぞ、覚えてお祈りいただければ幸いです。

(2023年8月24日 東北ヘルプ代表 川上 記)

献金感謝

2022年10月14日～2023年8月9日の期間、下記の皆様から、貴いご献金をお預かりしました。

献金は、祈りそのものと、心得ています。賜りましたご厚志に、深く感謝を覚え、ここに御芳名を記します。

NPO 法人東北ヘルプ 川上直哉

平井雅絵 大曲ルーテル同胞教会 井上修三 中屋重正 新生釜石教会 沼倉孝憲 井垣勝男 野辺地教会有志
時宗不退山長徳寺 住職 渋谷真之 遺愛女子中学校高等学校 北海道キリスト教会 釧路キリスト福音館 下谷教会 清水俊一
東洋英和福島の子ども支援プロジェクト「虹の橋募金」会計藤村美子 青戸教会子ども礼拝 佐藤慎太郎 山岡みちよ 大井美歩
清水恵子久ヶ原教会 東京都民教会 原宿教会子ども礼拝 青山学院女子短期大学同窓会 世田谷中央教会 頌栄教会 原朋美
東京カベナント教会 市田大二・恵美子 東京告白教会 岡村直子 千代田教会 深谷春男 牧甫 大倉一美 中嶋裕子 高桑郁子
久遠基督教会 杉並教会 児島夏子 竹本栄子 松浦賢治 宗教法人 聖書友の会 巢鴨聖泉キリスト教会 徳丸町キリスト教会
大日方由美 木村葉子 石井智恵美 金井美智子 国際基督教大学 塩田隆良 横田美奈子 恋が窪キリスト教会 村田藤江
下里綾子(小平学園教会) 小平学園教会 ひばりが丘教会 日野神明キリスト教会 月本昭男 城井廣部 細井孝江 辻剛
よろこび研究会代表奥田英男 遠藤茂雄 横浜上原教会 六角橋教会 代表役員 加山真路 入江修 塩田瑞代 田園江田教会
佐川英美 鶴見教会 横浜指路教会 横浜海岸教会 蒔田教会 西尾和歌子 横須賀教会 福井紀子 沼崎真奈美 大野覚美
岡進 松田芳昭 宮坂信章 益田貴美子 千葉本町教会 西千葉教会 武田和実 大谷借子 松戸教会 青木一芳・清子
市川三本松教会 いずみ会 倉石昇 山中伸郎 吉田裕子 川上政孝 四街道教会 大網伝道所代ム三吉明 関田寛雄
新津テイ子 吉沢修平 取手伝道所 宇都宮松原教会 小川暢子 ホーリネス大阪栄光キリスト教会 四條町教会 鈴木厚子
石川あつ子 飯沼一浩 西那須野教会 認定こども園西那須野幼稚園 オリーブの木キリスト教会 萩原恵子 菊地淑介・みどり
島田厚 杉澤卓巳 坂戸キリスト教会 明比信子 若月学 利根川恵子 関根悠紀子・道人 国井昌光・愛 新座志木教会
星野房子 東所沢教会 新所沢教会 行田教会 中村忠男 甘楽教会 山田節子 井出存祐 山田健治 富沢八重子 山梨教会
松井田教会 松本富雄 石川裕美 軽井沢追分教会 田所賢二 松本教会 ハヶ岳中央高原キリスト教会 足立正範・実紀子
富士吉田キリストの教会 木下和好・恵美子 羽野浩雪・環 前田茂巳・洋子 鈴木淳司 井川昭弘 岡崎茨坪伝道所 真柄周吾
加藤啓子 名古屋中村教会 小坂井勉 社会福祉法人名古屋キリスト教社会館事務長湧井規子 教会名古屋岩の上教会
大藪博康 名古屋中央教会 原科浩 伊藤まり子 渡辺徹朗 天白教会 牧師 渡辺徹朗 尾関幸子 南山教会 中島隆宏
渡辺真悟 長谷川正一 近藤直枝 桜井志穂子 上野緑ヶ丘教会 細川富代 井戸謙一 天満教会 大宮まぶね保育園 李相勲
在日大韓基督教会全国教会女性連合会 池田五月山教会 池田キリスト教会 似田兼司 藤田直子 田村仁美 三ツ本明子
枚方くずは教会 安藤眞一 濱田辰雄 京都南部地区 同志社教会 室町教会 野牧一弘 京都上賀茂教会 国兼光子 吉田伸
鴨東教会 田中美鈴 奈良いずみ 神戸聖愛教会 須磨教会 こども教会 松本聡 岩間節子 西神戸教会 榎本聡子 尼崎教会
西牧夫・あゆみ イエス団みどり野保育園 園長中田一夫 西宮一麦教会 吉田隆 河内常男 近藤晶彦 姫路野星教会 瀬戸昭
はりま平安教会 佐用チャペル 代表者 松本直展 岡山教会 児島教会 IGL 広島福音教会 野村篤子 橋本富子 佐竹早苗
東広島伝道所 女性会 高松シオン教会 徳島教会 芳我秀一 青柳芳明 門司大里教会 小倉徳力教会 福岡城南教会
柴田公文 濱地正枝 宮井武憲 日原広志 袖之原寛史 吉田正子 ルーテル健軍教会 改革派熊本伝道所財務本多ミヨ子
松崎義治 喜界教会 友愛幼稚園 下川羊和 幕田君江 松本緑 小川幸子 金南植 鈴木真理子 尚綱学院高等学校
新里・鈴木法律事務所 太田伸二 北三番丁教会 赤崎克俊 石巻広域ワイズメンズクラブ 清水弘一 世界食糧フォーラム・仙台
早坂まゆみ 渡邊邦子 青柳葉子 山室誠 尚綱学院大学宗教部 福田一彦 遠藤久夫 佐藤雅俊 木村すげみ 小島和夫
松本芳哉 宮崎正美 佐藤雅俊 斎藤泰子 南光台キリスト教会 仙台黒松教会 佐藤進 太田裕吾 小幡正 永澤汪恭
鈴木みね子 日本基督改革派仙台教会 昌林寺 代表役員 松山宏佑 小原豊・真喜子 他 15 名 清水孝夫 三條信幸 植木習
小杉澄子 久我恵美子 久我まなみ 阿部理恵・石川英子・佐々木裕子 一般社団法人シャロームいしのまき 橋本智子 丹田
くじらのしっぽ阿部かよ子 支倉紀正 石丸靖子 中澤竜生 古川幼稚園 伊藤一寿 エムアイティギヤザリング 石巻栄光教会
大野勉 荻原邦子 カ. ワイビーエスティーアンドエル 推洋平 鈴木基行・真理 仙台北教会 千葉一夫 ナラサムライ 横山昭一
磯田幸子 匿名(多数)

巻末言

昨年あたりから、「ニュースレター」のページ数が、増え始めました。今回はついに「38頁」にもなりました。作成しながら、驚いています。

驚いている、というのは、つまり、「こんなに、お伝えすることがある」という事実です。

貴い献金で、東北ヘルプの活動は維持されています。献金は、祈りであると、ずっと、私たちは語り合ってきました。祈りが続く限り、私たちの働きは続く。しかし、5年前から比べると「半額」くらいの献金額となっています（献金件数は、堅調なのです。それは、驚くべきこと・継続する祈り力であると、感謝を深めています）。献金の規模に応じて、活動は拡大し、縮小してきました。この数年は、「コロナ」もあり、私たちは活動をひたすら縮小してきたつもりです。しかし、ニュースレターのページ数は増えている。これは、どうしたことでしょう。

先日、京都で会議がありました。教会関係の会議でした。そこで、10年ほど昔にお会いした方が、声をかけてくださいました。長崎の方でした。私を覚えていてくださり、「被災地はどうなっていますか」と、質問くださったのです。

「汚染水」のこと。「病気」のこと。――私は、主に福島県内のことをお話ししました。それは、簡単にはお話しできない、複雑で厄介な事柄でした。メディアで語られていること、あるいは、市民運動の機関誌が伝えることとは、また違う、現場にある生々しいお話。それは、丁寧に・忍耐強く聞いてくださる方がなければ、決して伝わらないのだと、実感しました。そして、複雑で込み入った現状を「知りたい」と願ってくださる方のいること、その尊さに、大きな励ましを得たことでした。

「処理水」と呼ばれることになったらしい「汚染水」が、昨日、海洋放出されました。多くの仲間が、同じ悔しさを噛みしめています。でも、これは「はじまり」に過ぎない。来年は女川原発の再稼働も予定されています。風化は進み・進められ、そして、事態はいよいよ深刻化する。

京都でお話を聞いてくださった方に、私は「津波被災地」の現状をお話しできませんでした。福島県内の事柄だけで、情報量がいっぱいになってしまったと感じたのです。復興工事の矛盾があり、その矛盾の中でしかし、あきらめず・腐らずに、踏みとどまる人々がいる。分断は深刻に刻まれているけれど、和解の業にいそしむ人も、いる。そのことをお伝えするためには、おそらく、福島県内で起こっている事柄と同じ程度の密度で、お話を聞いて頂かなければならない。

幸いにして、私たちはなお、被災地の現場にとどまっています。お伝えすべき事柄は、むしろ増えている。あるいは、その密度が増している。祈りを集める機能は、いよいよ、私たちに託されている。そう感じています。最後まで読んでくださるみなさまが、その力を私たちに託してください。

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました。

追伸：このニュースレター作成のために私が南相馬を訪問していた7月末、神戸の内山牧師から、一本の電話がありました。「秋田豪雨水害」の惨状と、そこに向かってボランティアの働きを伝えてくださる電話でした。「何かできないか」と、ご一緒に考えました。それで、「補遺」をこの後に掲載することができました。ぜひ、お読みくださり、祈りを合わせて頂ければと思います。

2023年8月24日
東北ヘルプ代表

川上 直哉

秋田中央キリスト教会 支援へのお願い

クラッシュジャパン 理事 内山忠信

7月14～16日、秋田県は梅雨前線の影響で、記録的な大雨となり、太平川など河川の氾濫が多発しました。秋田市周辺の17市町村で490棟の浸水被害、秋田市では25,000世帯が、床上、床下浸水の被害となりました。

災害後の10日後の7月26日、27日の2日間、クラッシュジャパンと石巻クリスチャンセンターのスタッフが秋田市を訪問し、いくつかの教会に伺い、お話を伺わせて頂きました。

秋田中央キリスト教会（若松史志牧師）では、教会堂と牧師館の2棟が床上浸水の被害を受け、教会員方の初動でそれぞれ床上の清掃がなされました。若松牧師とお会いし、先生のお気持ちを伺いました。2日間の話し合いの中で、牧師館と礼拝堂の泥出し、洗浄、消毒などの必要を理解され、役員会で協議し、クラッシュジャパンに支援を依頼されました。

クラッシュジャパンの支援方針は、①教会の被災、②教会関係者の被災、③教会の置かれた地域の被災です。この方針からクラッシュジャパンは、石巻クリスチャンセンター、救世軍と共に、8月1日から支援活動を開始しました。まず牧師館1階の壁はがし、床はがし、高圧洗浄、消毒に取り組んでいます。続いて会堂（120平米）を行ないます。

被災直後は被災したショックから、何から手をつけていいのかわからない状況にあります。教会の皆さんにとっても、教会堂が床上浸水となるとは考えもしない出来事であったことでしょう。

支援が入ることも初めてのことで戸惑うことでしょう。ですから支援に入的过程中で祈ることは、教会の方々が神さまの平安の中で、事の成り行きを見守ってくださり、支援が進み、牧師館や礼拝堂の床が新たになることを通して、神さまの家族に支えられていることを実感され、このことが大きな励

まし、これから信仰を新たに進められる時となることを願うことです。

8月1日から作業の中で実感したことは、高温で熱中症になりやすい環境であることです。どうか事故なく作業が進められるようお祈りを願います。

礼拝堂の泥出しには、多くのボランティアが必要です。応援に来られる方が居られましたら、内山まで（090-8149-6211）連絡をお願いします。

またクラッシュジャパンの秋田での支援の働きのために献金による支援をお願い申し上げます。

クラッシュジャパンへの献金口座

ゆうちょ銀行 振替口座 0011-3-290907

名義 一般社団法人 クラッシュジャパン



被災後の礼拝堂入口



牧師館での壁はがし作業



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍泉尾小隊士官）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2022 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を渡って光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652